
日本ロシア文学会

関東支部報 No.34 (2016 年 10 月)

〒 338-8570 さいたま市桜区下大久保 255 埼玉大学人文社会科学研究科野中研究室気付
日本ロシア文学会関東支部事務局
E-mail: robunkanto@gmail.com

2016 年 6 月 4 日 (土)、早稲田大学にて日本ロシア文学会関東支部主催による春季研究発表会が開かれました。ロシア文学会顧問の川端香男里先生のご挨拶に引き続き、九本の修士論文、一本の博士論文、支部総会が行われました。約 60 名の支部会員が集まり、懇親会も大盛況でした。

本支部報では当日の報告内容に基づき、各報告者にあらためてご執筆いただいた原稿を掲載いたします。なお、本表紙では報告題は当日のもの、各報告者のご所属は 2016 年 6 月時点のものを示しています。

ナザランカ・カチャリーナ (東外大院)

ジェンダー的視点から見たトルストイと有島——『アンナ・カレーニナ』と『或る女』を中心に

安野直 (早大院)

リュドミラ・ウリツカヤ短編作品群における国家と性の表象

五月女颯 (東大院)

イリア・チャウチャワゼの「グルジア」

阿佐遼平 (東大院)

『婚礼』と“ポーランド人”の民族性——エスニックな感情の源泉と行方

木原槇子 (東大院)

ポーランド・ロマン主義における「バラードマニア」——浪漫性とバラードをめぐる議論を通して

畔柳千明 (東大院)

北京宣教団とイアキンフ・ビチューリン

早川萌 (国立国会図書館)

画家イリヤ・レーピンの滞仏期作品を再評価する試論

細川瑠璃 (東大院)

フロレンスキイの天動説——無限と不連続性を中心に

宮内拓也 (東外大院 / 国語研)

ロシア語名詞句の統語構造と名詞句内の要素の語順

阿出川修嘉 (東外大非常勤講師)

現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察：

可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について

日本ロシア文学会 関東支部報 No.34

目次

[支部長巻頭言]

伊東一郎	「緑のゲオルギオス」と『ドクトル・ジヴァゴ』の間で …………… 1
------	-----------------------------------

[春季研究発表会報告要旨]

ナザランカ・カチャリーナ

ジェンダー的視点から見たトルストイと有島 ——『アンナ・カレーニナ』と『或る女』を中心に …………… 3

安野直	リュドミラ・ウリツカヤ短編作品群における国家と性の表象 …………… 7
-----	-------------------------------------

五月女颯	イリア・チャウチャワゼの「グルジア」 …………… 11
------	-----------------------------

阿佐遼平	『婚礼』と「民族文学」 …………… 15
------	----------------------

木原槇子	ポーランド・ロマン主義における「バラードマニア」 ——バラード論争とレノーレ譚 …………… 19
------	---

畔柳千明	イアキンフ・ビチューリンの中国研究 …………… 23
------	----------------------------

早川萌	画家イリヤ・レーピンの滞仏期作品を再評価する試論 …………… 27
-----	-----------------------------------

細川瑠璃	フロレンスキイの天動説——無限と不連続性を中心に …………… 31
------	-----------------------------------

宮内拓也	ロシア語における名詞句内要素の語順導出の試み …………… 34
------	---------------------------------

阿出川修嘉	現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する 一考察：可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について 【博士論文の概要報告及び今後取り組むべき課題について】 …………… 39
-------	---

「緑のゲオルギオス」と『ドクトル・ジヴァゴ』の間で

伊東一郎

新しく日本ロシア文学会関東支部の支部長に選ばれた早々サバティカルでクロアチアに遁走してしまい、春の研究大会にも顔を出せず、申し訳なく思っているが、恒例ということで、ご挨拶の文章を書かせていただく。

今回クロアチアでしたかったことの一つに、ゼレニ・ユライ「緑のゲオルギオス」という春季儀礼を見ることがあった。これはヨーロッパ全域で4月23日または24日に祝われる聖ゲオルギオス祭に行われる（正確には行われていた）もので、クロアチアとスロヴェニアに知られている。1人の若者を白樺の枝葉で飾り、「緑のゲオルギオス＝ユライ」に仕立て、これを先頭にした行列が歌いながら家々を巡り歩く、という春の門付けの儀礼である。これをスロヴェニアに近い西北クロアチア・ザゴリエ地方のクムロヴェツという村で見ることが分かったので見に行った。ところで私がロシア・東欧の聖ゲオルギオス祭に関心を持ったのは今を去る34年前に遡る。1982年の夏に南ブルガリア・ロドピ地方のノヴァコヴォ村で生まれて初めて海外学術調査を行った時だった。

その頃私は勤務先の国立民族学博物館でスラヴ民俗学研究に従事していたが、この調査地でのテーマは、バルカン地方における牧畜文化であった。この村で調査を進めるうちに、私はブルガリアの牧畜民にとって聖ゲオルギオス祭＝ゲルギオフデンが極めて大きな意味を持つ春の祭であることに気づいた。バルカン東部の牧民はこの日を起点として羊群を冬営地から山の夏営地に移動させるのである。ブルガリアの牧羊民にとっては元旦のような最も大きな祭なのだ。

ところで社会主義時代のこととて、この村の図書館には、読む者のいる筈もない大量のロシア・ソビエト文学のブルガリア語訳が収められており、その中にはパステルナークのブルガリア語訳詩集もあったのだが、驚いたことにそこにはソ連ではまだ禁書だった『ドクトル・ジヴァゴ』の中の一章「ユーリイ・ジヴァゴ詩集」が収められていた。それを読むうちに、私はこの小説を大学入学2年目に、東中野にあったマヤコフスキー学院で江川卓先生に教わったこと、そこでこの小説の主人公の名がユーリイ＝ゲオルギオスであることに深い意味があることを教わったことを思い出していた…

この命名は恐らく偶然ではない… 25篇から構成されている「ユーリイ・ジヴァゴ詩集」のちょうど真ん中の第13篇として置かれた「お伽話」はロシアのドゥホーヴヌイエ・スチヒー（巡礼霊歌）に歌われる聖ゲオルギオスの龍退治をテーマにしている… そもそもユーリイ・ドクトル・ジヴァゴとは「生ける者の治癒者ゲオルギオス」と読めるではないか…気が付いてみればここブルガリアの農村でも聖ゲオルギオスは治癒者として信仰されている…

ちなみに呑気なこの村の図書館にはブルガリア語訳『パステルナーク詩集』と共に、ソフィアではとっくに回収されていた『イワン・デニーソヴィチの一日』のブルガリア語訳が誰にも読まれることなく眠っていた。

秋となり、3ヶ月の調査を終えて村からソフィアに戻ると、私の村での調査に関心を持っ

たブルガリア・テレビが、私の番組を作りたい、と言ってきた。そして私へのインタビューのためにテレビ局がスタジオを押さえたその日に、あろうことかブレジネフが亡くなった。忘れもしない 1982 年の 11 月 10 日である。テレビ局はパニックになり、テレビ放送からお笑い番組が消え、葬送音楽が流れ続けた。店頭から酒も消えた。私の番組もどこかに吹っ飛んでしまった。外国からの訃報にも関わらず、である。まさかブレジネフにブルガリアで最後っ屁を食らうとは思わなかったが、私の友人・知人たちは皆ブレジネフの死を悲しんではいなかった。時代はペレストロイカに向かって動きだしていた。

7 年後の 1989 年、私は大学から派遣されてペレストロイカ末期のモスクワに滞在したが、その年末にベルリンの壁が崩れ、禁書だったパステルナークの『ドクトル・ジヴァゴ』がソ連で初めて出版されるのを目の当たりにした。2 年後の 1991 年にソ連は崩壊し、旧東欧の社会主義圏は全て「民主化」された。

今回クロアチアから足を伸ばして 30 年ぶりにかつての調査地南ブルガリアのノヴァコヴォ村を再訪した。1300 人あった村の人口は 300 人に激減。ロシア語の先生が校長をしていた小学校はなくなり、村の周りにあった広大なタバコやブドウ畑も今はない。若者は皆村を出て、老人だけの村になってしまった。今ノヴァコヴォ出身の一番の有名人は、アトス山のブルガリア人修道院「聖ゲオルギ」（また聖ゲオルギオスだ！）の修道院長になったアムブローシイ師である。

年のせいかご挨拶が懐古譚になってしまったが、こうして私がロシア文学とスラヴ民俗学の間を行き来しているうちに時代は大きく変わった。どんな僻遠の村にも自由に入り、方言、民俗、考古等々の調査をし、オリジナルな研究を行うことが可能になったのである。翻って春の研究発表会のプログラムを見ても隔世の感がある。研究の深まりだけでなく、過去に捉われないテーマの多様化と視野の広がりが確実に進んでいる。そのような現在、関東支部の長として私に何ができるのか、改めて考えるこの頃である。

ジェンダー的視点から見たトルストイと有島 『アンナ・カレーニナ』と『或る女』を中心に

ナザランカ・カチャリーナ

明治時代から現在に至るまで、日本の知識人にとって、自然主義者、人道主義者としてのレフ・トルストイの影響は言うまでもなく非常に大きい。トルストイの思想が日本人に広く受け入れられた理由として、八島雅彦はその時代の日本社会の変容や道德の危機があったと述べている¹。前の封建時代が終わり、新たに明治時代が始まったが、儒教と武士道に代わる新しい道德は現れなかった。このような状況で、日本の知識人にとってロシア文学は道德の間隙を埋め、「人生論の教科書」になったのではなかろうか。人生について深い思索を続けたトルストイの思想は、白樺派の文学者を中心に大正期にも日本の作家に影響を与え続けた。その中でも、有島武郎はトルストイの思想に最も強く感化された1人であり、有島が文学の道を歩むにあたってはトルストイを読んだことが大きな契機となった。トルストイと有島の個性は一見したところ大きく異なっているが、復活などの要素を否定するキリスト教観や厳しい内省への性向など、二人の類似点も多い。トルストイが有島に与えた文学的、社会思想的な影響は今まで多く研究されてきたが、ジェンダー的な観点から見た場合、二人の作者の共通点や相違点はどうなるのだろうか。

ジェンダー観について論じるために、いくつかのジェンダー的概念（エロス、アガペー、プラトニック・ラブ）を導入したい。「エロス」と「アガペー」は古代ギリシアから導入された対照的な恋愛のタイプであり、「エロス」は「性的な恋愛」とし、「アガペー」は「自己犠牲的な人間愛」とする。「プラトニック・ラブ」も古代ギリシアから由来した概念であり、例としてヨーロッパの騎士道が挙げられる。「肉体的な欲求を失くした精神的な愛」とされ、ある意味でエロスと対照的な関係にあるが、一方で、アガペーとも異なり、ロマンチックな要素を含み、一般的な「人間愛」ではなく、男女間の愛を指している。

両作者のジェンダー観の相違点と共通点を見極めるためには彼らの子供時代に遡る必要がある。フロイトなどの20世紀の主流な精神分析学者によると、人の幼少期の経験などはセクシュアリティの基礎であり、特に異性の両親の姿は、セクシュアリティに圧倒的な影響を与えるとされており、それはトルストイと有島の場合において母親に当てはまる。トルストイが1歳半だったころに亡くなった母親が終生彼にとっての女性の理想像だったということは、ルース・クレゴ・ベンソン²を始めとし、バシンスキーなどの研究者が指摘してきた。

¹ 八島雅彦「日本におけるトルストイの現象」柳富子『ロシア文化の森へ——比較文化の総合研究』ナダ出版センター、2001年、488-504頁。

² Benson Crego R. Women in Tolstoy. The Ideal and the Erotic (Urbana: University of Illinois Press, 1973), pp. 4-9.

母親の記憶がトルストイになっただけでなく、黒い横顔を除き、彼女の肖像画も残っていなかったため、彼女のイメージはさらに理想化されやすかった。残っていたのは、彼女の書いた詩、手紙、日記のみであり、それに基づいてトルストイの考え出した母親の理想的な像は神聖な意味を持っており、その明確な描き方が『幼年時代』でなされている。出会った女性を母の理想像に照らし合わせ、どの恋愛のタイプよりも、母性愛に最も近い「アガペー」はトルストイに重んじられていた。

有島が子供の頃に受けた体罰を含む厳しい躰は、リベラルな環境で育ったトルストイの状況と大分異なる。母親の残した女性像に関しても、母を理想化したトルストイに引き換え、有島は母親のヒステリックな発作と虚言癖を見てきたことを『私の父と母』で確認できる。よく母に叱られたことも記憶に残っていた有島は、常識から考えれば、どちらかという、ネガティブな母親像を持っていたはずだが、実際はそうではない。母の苦しい過去に同情し、彼女の弱点を深く理解して受け入れようとしていた印象を受ける。また、専業主婦であったことによって、母親の本質と趣味は限られていたということも有島自身が述べている³。このような極めて現実的で同情深い母の姿の受け入れ方が、トルストイと異なるジェンダー観に繋がったと言えるだろう。

両者の育った環境は異なっていたにも拘らず、結果的に「二元性」という点にたどり着いたというところは両者に共通している。その一つの原因は、キリスト教に接触したことだった。正教の道徳を子供のころから身に付けていたトルストイと比べ、有島はピューリタン派キリスト教の道徳に大学生の頃に出会った。二人ともキリスト教の影響を受け、一生神の存在を否定したことはなかったが、宗教の原理を強く疑い、その教えの意味を探究した結果、最終的に到達した思想は正統なキリスト教とは多く異なっていた。有島がトルストイの著作に初めて出会った契機も宗教を巡るエッセイによるものであったことも、「宗教」は二人にとって共通する要素であることを証明する。両者の場合において、それは「エロス」に対する否定的な視座を作る要因になった。売春婦や農奴などの女性と14歳から交渉を持っていたトルストイと違い、有島は31歳で結婚するまでは、女性との肉体関係を持たなかったため、エロスの代わりに、プラトニック・ラブに身を委ねた。しかし、留学中に会った、エロスを賛美するホイットマンの詩は有島のジェンダー観をよりオープンな方向へと変えたことを『惜しみなく愛は奪う』によって確かめることができる。それとは対照的に、一生アガペーを重んじていたトルストイによるエロスの扱い方は時間とともに否定的になっていく一方であった。それは彼の作品（『幸せな家庭』、『戦争と平和』、『クロイツェル・ソナタ』など）の時系列的な分析を通して明確になる。

両者のジェンダー観における大きな相違点の一つは、女性解放運動に対する態度だった。トルストイが急進的な女性を頻繁に批判していたことは、エッセイや文学作品（『感染された家族』など）でよく見られる。一方、保守的な家庭で育った有島は、アメリカ留学をきっかけに、女性の社会的及び性的な立場について深く考え始め、女性理解の先駆者になったとしばしば指摘されている。ただ、トルストイも、多くの研究者が描いているほどの「ミソジニスト」でも「女性恐怖症」でもおそらくなかったということを主張しておきたい。それは

³ 有島武郎全集、第7巻「私の父と母」筑摩書房、1980年、188頁。

『クロイツェル・ソナタ』の後書きなどを偏見なく解説すれば、たどり着く結論になるだろう。

以上に述べた両作者のジェンダー的思想を把握することは、『或る女』と『アンナ・カレーニナ』を比較するためにも役立つと考えられる。『或る女』は「日本の『アンナ・カレーニナ』」と呼ばれるほど、二つの長編は似通っていると今まで指摘されてきた。トルストイと有島は男性作家でありながら、女性の立場からストーリーを描いたことは少なくともロシア文学においては、一般的な手法とは言いがたい。さらに、プロットの基には不倫である恋愛話が置かれており、それぞれの主人公、アンナと葉子は世間から見たら罪深い人物と見なされるが、作者たちはヒロインを哀れに描こうとしている。有島は『アンナ・カレーニナ』に感銘を受け、その結果として『或る女』を企てたことを柳富子が指摘している⁴。つまり、不倫を起こした女性は社会から批判を受け、疎外されるが、それを哀れに描くことによって、社会における何らかの問題点を指摘するというトルストイの手法を有島は導入したと判断できよう。

ロシアの貴族であるアンナとヴロンスキーと日本の中産層の葉子と倉地は国も時代も異なっているが、実はカップルの中の関係性、衝動とその原因は類似点が多い。例えば、同棲生活が不幸に陥る主な原因であるコミュニケーション不足や嫉妬が挙げられる。アンナと葉子のエロスに対するスタンスも似通っており、カレーニンと木村に対するヒロインの不公平さと残酷さも注目に値する。その残酷さは、激しいエロスしか愛情として認めないというヒロインの過ちの結果である：

「(……) わたしはおまえの夫であり、おまえを愛しているのだから」

一瞬アンナは顔を伏せ、目に宿っていたあざ笑うような光も消えた。だが「愛している」という言葉がまたもや彼女をむっとさせた。彼女は思った―愛している？この人に愛することなんてできるのかしら？もしも愛というものがあると聞いたことがなかったとしたら、この人はけっして愛なんていう言葉を使わなかったはずよ。だって愛がどんなものかもわかっていないんだから。⁵

葉子が木村の立場にいたら、事業を捨てても、乞食になっても、すぐ米国から帰って来ないじゃいられない筈だ。(……) 木村の持つ生活問題なり事業なりが、葉子と一緒にしてから後の事を顧慮してされている事だとして見ても、そんな気持ちでいる木村には、何と云っても余裕があり過ぎると思わないではいられない物足りなさがあった。⁶

カレーニンと木村の気遣いはヒロインに評価されず、彼らの利他的な「アガペー」はアンナと葉子にとって理解できない愛情なのである。

ヒロインの相違点も多く見られるが、ここでは一つの決定的な違いだけを挙げたい。アン

⁴ 柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、1998年、199頁。

⁵ レフ・トルストイ『アンナ・カレーニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、367-369頁。

⁶ 有島武郎『或る女』新潮社版、1995年、551-552頁。

ナが自殺したのに対し、葉子は手術の失敗が原因で亡くなったという点は、二人のヒロインや長編のメッセージにおける大きな違いである。アンナより体や精神の弱い葉子は、アンナよりも生の欲動が強く、「新しい女」の先行者になったとも言える。そこには、女性解放運動に対するトルストイと有島の異なるスタンスが明らかに表れている。

(なざらんか かちゃりーな、東外大院)

リュドミラ・ウリツカヤ短編作品群における国家と性の表象

安野直

1. はじめに

本論は女性作家リュドミラ・ウリツカヤのテキストにおいて、女性の身体がいかに描写され、またそこにどのような意味付けがなされているのかを、既に失われたソ連国家のあり方との関連から検討することを目的としている。

ウリツカヤのテキストにおいて、国家的なものは、個人の身体に常に、そして既に内包されており、それらが不可分に絡み合い、最も私的なものが同時に最も公的なものとなる場合さえある。まさにこの点こそ、ウリツカヤの小説における女性の身体表象の独自性であると考えられる。以下では、このことを示すために具体的にテキストを検討してみることにしよう。

2. ソ連の象徴としての赤

本節では、短編「奇跡のような凄腕」を色彩に着目して読んでみたい。というのも、この短編では、社会主義のイデオロギーでありソ連的なものの象徴である制服の色彩がプライベートであるはずの少女の身体に影響を及ぼしているのが見て取れるからだ。

ウリツカヤのテキストに様々な色彩が効果的に配置されていること自体は決して特異なことではない。しかし、ここで取り上げる「奇跡のような凄腕」がとりわけ重要なのは、そうした色彩の配置の技法が、ウリツカヤにとって重要なテーマである国家と女性の身体との関係の表現に密接に関わっているからである。興味深いのは、一般にソ連国家の公式的な象徴性を担う「赤」という色彩が、同時に登場人物のプライベートな身体のあり方に直接に結びついている点である。ここでは、「赤」という色彩によって、公式なものと私的なものが、女性の身体の内不可分に融合し共存している様を読み取ることができるのだ。

この短編では、主人公の少女たちは、スターリンに親和的な性格付けがなされている。身体描写においても、プロットにおける人物造形という観点においても、少女たちは一貫して社会主義に忠実な存在として描かれ、体制に懐疑的な腕のない女性トーマと効果的に対比される。

作品冒頭で、主人公であるピオネールの少女たちの制服を着た様子が詳細に描写されるが、ピオネールのネクタイの赤はとりわけ強調される。ネクタイの赤は物質的色彩を示すのみならず、社会主義を象徴する色という含意が、元来込められている点には注目すべきだ。物語の時代設定が1950年代のスターリン期であり、この時代において赤は一般に社会主義を象徴する色彩であることから、読者にとってピオネールのネクタイの赤と国家の公式イデオロギーとのつながりは疑う余地のないものとして映るはずである。さらには、このピオネールの赤いネクタイはその後幾度となく登場し、この公式的な含意を殊更に強調しているようにも読める。

ところがテキストの中で、この赤という色は徐々に、公式のイデオロギーとそれ以外のもの

のへと伝播していく。作品冒頭から提示されている赤は、リンゴの色彩へとつながる。そして、再びリンゴの連想から、赤いネクタイへと色彩のイメージは移り変わる。その後も、「赤ワイン」といった語が登場するのだが、制服のネクタイの赤に端を発し、テキスト全体に赤の色彩が効果的に配置される。

重要なのは、こうした色の連関が身体にまで及ぶことだ。ピオネールの少女たちの中の一人であるスヴェトラーナは「彼女は広い眉をひそめて、赤くなった」¹と描かれる。「赤くなった покраснела」という語は、スヴェトラーナの恥ずかしがっている様子を表すと理解するのが自然であろう。しかし、上述した色彩の連関を考慮するなら、スヴェトラーナの顔という身体の一部は、その赤という共通の色の連関の中で、社会主義国家を象徴するネクタイの赤と重ね合わせられる。

このように社会主義を示す色彩と身体とが複雑な絡み合いを見せる箇所は複数存在する。以下は、手のない女性トーマと対面した時の、少女アリョーナの姿である。

アリョーナは鞆の留め具をはずして、しわくちゃのルーブル紙幣を抜き取って、それを手縫い袋に突っ込んだ、鼻に汗が滲むくらい赤くなった。²〔下線引用者〕

ここでは、トーマに施しをしたことに自ら羞恥するアリョーナの赤い顔は、にじみ出る「пот 汗」によって、より生々しく個人的感情を含んだ少女の身体的な反応の結果として表現されている。テキストに配置されたソ連の公式イデオロギーの象徴としての赤は、その色彩を介して少女の身体の個人的で生々しい情緒的な反応に連関させられる。こうしてみると、ここにはピオネールの制服を身にまとった理想的身体（＝公）と、「汗」を流す生きた身体（＝私）がひとつの体のなかで不可分に混じり合い、共棲しているのを読み取ることができる。

3. 身体と「体液の流出」

ウリツカヤのテキストにおいて非常に興味深いのは、ペトルシェフスカヤなど他の女性作家によって、身体がプライベートなものであることを示すために利用されてきた、個人的生理や感情の表現手段としての「体液」のテーマを、それとは逆に、むしろ国家という公的なものの生成／消滅の過程と連動させ、その2つをひとつの身体の中で隣接させて、個人的な身体のにかに国家的なものが分かちがたく絡みついている様を描くために利用している点なのである。

スターリン期を舞台とした短編「その年の3月2日」では、女性の身体からの体液の流出と国家との間にはっきりした連関を読み取ることができる。主人公の少女リャーリャが腹痛によりトイレにこもり、初潮を迎え、自らの経血を目にする。女性のセクシュアリティを受け入れられず葛藤するリャーリャの極めてプライベートな身体上の変化が示される。しかし、このリャーリャの経血も、実はスターリンの死という大きな国家体制の変化と関連して

¹ Улицкая Л. Девочки. М., 2013. С. 19.

² Там же. С. 29.

いることが明らかになるのである。初潮によるリャーリャの身体からの流血は、個人的な生理現象やそれに対するプライベートな困惑や恐れでありながら、ソ連国家の崩壊という表象を同時に身体の中に孕んでしまっているともいえる。重要なのは、このひとりの女性の身体の変容が、国家的な変動とつねに並行し密接に絡み合っているという点なのだ。

4. 身体と視点の変化

本節ではさらに、こうした公／私のあり方が、ひとりの人物の身体を描写しながらも、焦点移動によって変化し、最終的にそれらが身体上で溶融されることを明らかとしたい。

短編「オルローヴィ・ソコロヴィ」では、身体をめぐる2つの側面——規制された身体と生身の身体——が、3人称の語りにおける登場人物の視点の変化によって描き分けられており、2つの側面を有した総体としての身体にソ連国家の印が書き込まれている。

主人公の女性ターニャはパートナーであるアンドレイとの間にできた子どもを何度も中絶するわけだが、これから示すのは、パートナーであるアンドレイの母アーラの視点から、中絶後のターニャの身体は「女性の機械 *женская машинерия* [女性器] 全体が、驚くほど力強く、不安定で脆弱であることを知っていた。〔下線引用者〕」³と語られる。

ここでは、ターニャの女性器が詳細に描写されているが、女性器そのものを表す語は、「女性の機械 *женская машинерия*」と記されることによって、工場の機械の一部のように脱性化された印象を受ける。

アンドレイの母アーラによって語られた無性的な身体イメージは、ターニャのパートナーであるアンドレイに焦点化されると、そのあり方も変化する。

ちんちくりんの足、膝下の深い傷跡、平らなお腹の上の狭い毛の道、小さな胸の半分を占めている大きな乳首、手足は短めで、指も同様だ。素敵で美しい首。絶妙な顔の卵型。⁴

3人称の語りでありながら、ターニャのパートナー、アンドレイの視点から、身体が語られ、ターニャの身体は極めて主観的に描出される。アンドレイによって語られる身体は、イデオロギーとは距離を置いた生身の、肉体的なものであり、先ほどみた機体的イメージとは明らかに異なった人間的なものである。

ところが作品終盤では、この公／私の二項対立が崩され、ターニャの身体にソ連国家が、文字通り、書き込まれることとなる。次に引用するのは、ターニャが仲間らとダーチャでヴァカンスを過ごす場面である。

ターニャはもうビキニを着ていなかった、反対に、肌を覆った水着を着ていた。なぜなら、彼女のかつては魅力的だったお腹には、帝王切開の後に残った乱暴なソヴィエ

³ Улицкая. Л. Первые и последние. М., 2014. С. 138.

⁴ Там же. С. 148.

ト流の縫目 советскими швами が細長く伸びていたからだ。⁵〔下線引用者〕

ここでは、主人公ターニャの身体の表面に、「ソヴィエト流の советскими」の傷が直接的に刻まれている。この「ソヴィエト流の縫目」とは、ターニャの帝王切開時の傷であるが、ソ連においては、産婦人科医療の質が低く、劣悪な環境であり、こうした社会的背景を示すものであろう。いずれにせよ、ここでは出産時の身体上の傷という一見すると極めてプライベートなものが、公のものと分ち難く結びついており、女性個人の生々しい身体のごく私的なあり方が、そのまま国家のあり方を同時に示すという、ウリツカヤのテキストにおけるこうした身体表象の特質を最も明瞭に表した例であると言えよう。

おわりに

ウリツカヤに関するこれまでの研究では、ソ連国家と小さな個人という二項対立的にとらえる読み方が主流を占めてきたように思われるが、そうした読解が常に見落としてきたのは、私的と思える身体の中に、既にソ連国家のイメージが侵入あるいは内在し、身体に刻み込まれ、隣接し共鳴しながら、互いに不可分に絡み合っている、という彼女のテキストの特質なのである。

（やすの すなお、早大院）

⁵ Там же. С. 159.

イリア・チャウチャワゼの「グルジア」

五月女颯

1. はじめに

サイードが『オリエンタリズム』で批判したのは、西洋／東洋の二項対立的パラダイムをもとに「西洋」が「東洋」を遅れた、劣ったものとすることで支配を正当化する思考様式である。しかしロシアのオリエンタリズムに関する先行研究は、この図式がロシアには必ずしもそのまま当てはまるものではないと指摘している。これはロシアの半ヨーロッパ半アジア的な性格のためであり、ロシアは時として「西洋」にも「東洋」にも成り得る曖昧な表象がされるという。

もっとも、こうしたロシア・オリエンタリズムの性格を評定したところで「東洋」とされた諸地域は「東洋」のままでしかなく、結局のところオリエンタリズムの表象をなぞるばかりである。この問題意識の下、本研究は19世紀グルジアの知識人イリア・チャウチャワゼ ილია ჭავჭავაძე (1837-1907) によって、ロシアによるコーカサスの諸表象がどのように見返されたのかを検討する。貴族の家庭に生まれた彼は1857年にペテルブルク大へ留学、帰国後は銀行の創設や識字運動にも携わり、最晩年にはロシア帝国国家評議会の議員にも選出されるなど、作家としてのみならず社会活動家としても多大な業績を遺し、国民作家の一人として今日まで高い評価を受けている。

2. ロシアへのパロディ・アイロニー

チャウチャワゼは、留学からの帰国の旅程に材を取った作品『旅人の手紙：ウラジカフカスからトビリシまで』を著している¹。副題の通り、ロシア側の街ウラジカフカスからグルジアへ至る旅程で語り手の「私」が経験した様々な出来事や思索が書かれており、彼のマニフェスト的な作品との評価もある²。

検閲の対象にもなった第1章は、早朝ウラジカフカスの宿から出発する場面で始まる。「私」の馬車を操るロシア人の御者は、顔を洗わず櫛も掛けずといった醜い身なりをして御者台で居眠りしている。この様子を見た「私」は次のように語る。

ロシアの画家たちの絵画には、この太い首の「御者」のアホ面やそのマヌケな容姿やノロノロとした動きや人でなしでケモノじみた徘徊やらが、なんともきれいに取り除

¹ 執筆年は1861年とされているが、実際に雑誌『選集』上に刊行されたのは71年、さらに無検閲の版は92年になって初めて出版されている。作品からの引用は筆者が訳したものである。また紙幅の都合から論旨に関係ない引用では原文を省略する。

² Paul Manning, *Stranger in a Strange Land: Occidentalists Publics and Orientalist Geographies in Nineteenth-Century Imaginaries*, Boston: Academic Studies Press, 2012, p. 29.

かれているのだ。まったく絵の素晴らしさの二倍ほど、現実是不快なものである。³

これがロシアのロマン主義の画家や作家によるコーカサスの美化に対する明確なアイロニー的反論であることは論を俟たないだろう。ロシア文学では、御者は愚鈍や狡猾な現地人と表象されることが一般であるが、ここでは醜い身なりのロシア人とした上で、御者の使う／使われるという植民地的な関係性をもまた転倒させている。

このロシア人御者の醜さは、いよいよ出発という時の描写によってまた強化されている。繋がれた馬が御者の言うことを聞かず動かなくなるが、そこで御者は次のように悪態を吐く。

ცხენები მიდგნენ–მოდგნენ, მაგრამ ალაგადამ არ დაიდრნენ. Ну, чо-о-рт, трогай што-ли! — დაიყვირა „იამშჩიკმა“, აიქნია სადავენი და ფეხებითაც ტყაპუნი დაიწყო. (...) ამ ყოფას ის ჩემი ნაცნობი ფრანსიელი ფანჯრიდამ უყურებდა და სიცილითა სკდებოდა.⁴

馬は右往左往するも、しかしその場から動かなかった。ちっくしょう、動かんかい！——「御者」は叫び、手綱を振り上げ足をバタバタと動かし始めた。(…)この状況を、あの私の知人であるフランス人が窓から眺めて、笑い死にそうになっていた。

ここで登場するフランス人は「私」との別れの際、「私」のロシア製馬車の粗雑な造りを見て、もし自身が乗ったら気分が悪くなり脳が腐るなどと同情してみせた後、上記引用のように「私」とロシア人御者の乗った馬車が動かないのを嘲笑する。これはフランス＝「西洋」から見ればロシアもグルジアも文明の遅れた「東洋」だとして、ロシアの「西洋」としての自己表象を否定するものである。

第3章で登場するロシア人の自称士官は、この意味でまさに「西洋」としてのロシア表象のパロディである。士官はある「科学的な」発明を成し遂げたと「私」に自慢する。それは召使いが砂糖を盗むことへの対策として、砂糖入れに蠅を捕まえて入れておくというものだ。蓋を開けると蠅が飛び去ってしまい泥棒が露見する、という仕組みらしい。ではウォッカ泥棒に対して応用してみてはどうか、とするのが次の引用である。

— [...] არაყის ბოთლშიაც კი ვცადე ბუზების ჩასმა, მაგრამ ეგ წყეულები შიგ ირზობიან — губа не дура.⁵

「(…) ウォッカのボトルにも蠅を入れてみたのですが、その呪われた蠅は中で溺れてしまうのです——舌が肥えていますね。」

³ Ilia Ch'avch'avadze, "Mgzavris C'erilebi," *Rcheuli Nats'armoebebi Xut' T'omad*, vol. 2, Tbilisi: Sabch'ota Sakartvelo, 1985, p.5 .

⁴ Ibid., p. 6.

⁵ Ibid., p. 16.

一見してウォッカのボトルに蠅を入れれば死んでしまうことは自明のように思われるが、しかし士官は真剣な口調で「舌が肥えている」為だと説明する。こうした「科学的な」発明が彼の後にも続いて為されるようグルジアを啓蒙することで、小さな町トビリシもやがてペテルブルクのような大都市に発展すると力説するが、もちろんこれは文明の使者というコーカサス支配のイデオロギーへの痛烈なアイロニーだと言えよう。

ここまで引用した箇所からも判るように、全体を通してグルジア語で書かれているテキスト中において、数か所でキリル文字・ロシア語が用いられていることは注目に値しないだろうか。文芸理論家のハッチオンによれば、アイロニーは作者のアイロニー的な意図のみで成立するのではなく、読者がアイロニーとして読み取ることで初めて成立するものとした上で、アイロニー的意図を伝達するために作者は様々な合図をテキストに書き込むという⁶。ハッチオンは別言語の使用をこうした合図の例として挙げてはいないが、これは言語的のみならず視覚的にもアイロニー的な合図と言えよう。作者はロシア語を意図的に用いることで、ここまで指摘したようなアイロニーやパロディによって示される、ロシア語の先行テキストとの間テキスト的な関係を読者に示している。

3. 父世代へのパロディ・アイロニー

ところで『旅人の手紙』は、ロシア語のみならずグルジア語の先行テキストとの間テキスト性も有している。それは父世代のロマン主義詩人グリゴル・オルベリアニ（1804-1883）の詩『惜別の夕べ』及び『乾杯の挨拶、あるいは戦争の後の夜の宴会、エレヴァンの近郊で』の2作品からの引用である。

グルジア・ロマン主義文学の地詩学的な戦略について、ラムとシャティリシヴィリは次の3つに区分している。すなわち、ロシア／グルジア／北コーカサスという三項論をいかに操作するかについて、①ロシア（グルジア）／北コーカサス、②グルジア／北コーカサス、③グルジア、の3通りがあり、①はグルジアがロシアのコーカサス進出に協力的であったことを背景として、ロシアのロマン主義と同様に北コーカサスを支配の対象として客体化・風景化するもの、②はロシアの項を消去し、あたかもグルジアがコーカサスの盟主であるかのように表象するもの、そして③はロシアのみならず北コーカサスの項も消し、グルジアをある種のユートピアとして描くものだという⁷。引用された2作品については、『惜別の夕べ』は①に、『乾杯の挨拶』は②にそれぞれ当てはまる。

『惜別の夕べ』ではウラジカフカスにいる語り手によってロシア・ロマン主義と同様の風景描写がなされているが、『旅人の手紙』はそれを次のようにパロディ化している。

我々の荒れ狂ったテレク川はウラジカフカスからは、もはや我々が詩人が言い表したテレク川ではなくなる。

⁶ Linda Hutcheon, *Irony's Edge: The theory and politics of irony*, London and NY: Routledge, 1994, chap. 6.

⁷ Harsha Ram and Zaza Shatirishvili, "Romantic Topography and the Dilemma of Empire: The Caucasus in the Dialogue of Georgian and Russian Poetry," *The Russian Review*, 63 (January 2004), pp. 1-25.

「テレクは走り 渦を巻き
巖は男声を 歌いあげる…」

そこでは、あたかも鞭打ちの刑を受けたかのように、あるいは高い官位を受けたかのように、流れが緩み静かになる。しかし、恐らくテレク川がそのように静かになってしまったのは、男声の歌い手である巖はもう隣にはないからで、その巖とは、

「巖の心の 雲々は
黒く上へと 横たわり
怒りを抱き 大地へは
洪水せんと 脅かす。」⁸

ロシアの街ウラジカフカスでは川は静かだが、このことは後に「私」がゲルジア側へと峠を登るにつれ、川の流れが激しく生き生きとするという描写とは対照的だ。ここでは川の野性味ある荒々しさはすなわちゲルジアらしさを表すが、それがロシアでは「鞭打ち」や「官位」によって静まってしまうとされている。

一方『乾杯の挨拶』では、ゲルジアの歴史を讃える文脈で用いられるのみであり、上述したようなアイロニーを読み取ることはできない。

すなわち作者は、『惜別の夕べ』の①の地詩学的戦略に対してのみアイロニー的な応答をしており、父世代のロシアに追従する姿勢に対する批判として読むことができる。

4. まとめ

『旅人の手紙』のアイロニーは、ロシア・オリエンタリズムによる蔑視に対して、ロシアの後進性を「西洋」に対置する形で強調し、ロシアもまたゲルジアと同じ「東洋」にあることを指摘する。それと同時に、啓蒙というロシアのコーカサス支配のイデオロギーに盲従する父世代を批判するものであり、19世紀後半以降のロシア帝国下にあったゲルジアの文壇や言論界を論じる上で重要な作品である。

(そうとめ はやて、東大院)

⁸ Ch'avch'avadze, "Mgzavris C'erilebi," p. 7.

『婚礼』と「民族文学」

阿佐遼平

1. 「民族文学」再読の時代

私が『婚礼』に対する眼差しを鋭くし始めた 2014 年という年は、ちょうど第一次世界大戦開戦から 100 年、米中国交正常化から 35 年、そしてベルリンの壁崩壊から 25 年の歳月が経過した節目の年であり、そうした過程から述べるならば、それは大海原のグローバル化という波が、いよいよ海岸線へと到達しつつあることを象徴するような年となるかのように思われた。こうしたことを予測した者とは言えば、例えばゲーテは文学にユートピア的な普遍志向を夢想したし、ストレンジは「国家の退場」という言葉を使い、その役割の極小化する国家と共にある未来像を描いた。あるいはホブズボームの予測は、「今やネーションとナショナリズムの周りをミネルヴァのフクロウが旋回しつつあるが、これは願ってもない前触れである」という、その幸運な未来を示唆するものであった。それらは一様に、「多」から「一」へという方向への運動のベクトルであったと言えるだろう。

しかし 2014 年、そして 2015 年という年において、メディアを通じて浮上した世界の話題とは言えば、クリミア危機であり、スコットランド独立投票であり、IS の台頭であり、あるいは台湾や香港における大規模デモ、カタルーニャの独立への動きといったような、「多」から「一」へという運動に逆行するような事件を多く含んでいた。

今日の我々はグローバル化という運動に巻き込まれざるを得ない。その観点は「多」から「一」へという見方が要請される一方で、そこにおいて表象されるのは「一」から「多」という正反対の力学的作用をも孕んでいる。したがって、そうした解釈の目はどちらか片一方に留まることを是とはしない。このような事象を表象するものの一つとして文学を見るのならば、文学もまたその例から免れることは出来ないだろう。

『婚礼』とはいわば「民族文学」である。そして、その問題とは、現代が「ナショナリズムのグローバル化」という時代にあるという点において、決して「遠い他者」の問題として捨象できるようなものではない。「他者」とは何か——。こうした視点から『婚礼』をみるならば、以下のような二つの興味深い問いを作品は示唆する。およそ 110 年前に描かれた『婚礼』とは、現代と同じように「自己とは何か」を問い続けた、当時互いが「他者」であった二つの階層の物語である。したがって、2016 年という現在地点に立つ日本人の我々は、第一に「他者としてのポーランド民族文学『婚礼』に対し、いかにアプローチできるのか」と言う問いを投げかけられよう。次に、「他者であった集団は『婚礼』においていかにして相見え、そうした両者はいかなる道を辿ったのか」、「ポーランド人はそのような『婚礼』をどのように捉え、その結果『婚礼』とはポーランド人にとって何であるのか」という問い——現代とも通ずるアナロジカルな問い——を投げかけることが出来るだろう。

2. 「民族文学」をどう読むか——民族の自己認識を理解しようとした場合

「ヴィスピャンスキの作品は——文学にしても、絵画にしても——クラクフという背景においてのみ理解が可能になる」¹

これは、芸術史の教授であったタデウシュ・ドブロヴォルスキ Tadeusz Dobrowolski の言葉であるが、一般論として「民族文学」の自律性に基づく他者のアプローチの困難性といった問題に敷衍することも可能かと思われる。こうした問題はサイドも投げかけているが、その回答として挙げられたのが「直接的感受性」であった²。しかしながら、たとえその「直接的感受性」を保とうとしても、以下のような困難が生じうる。例えばフッサールの他者も含めた統握の方法を整理すれば、それは須らく経験、あるいは諸体験、自己の内にある前提を包含しているのであり、外国語から母国語への翻訳にしても、外国語を発音する際の母国語の訛りにしても、能動的にせよ受動的にせよ、あらゆる自己の諸前提に志向されるというように要約することが出来る³。したがって、このようにフッサールの仮説を援用するならば、「直接的感受性」とは直接的な交わりではあっても、感受の方法は「自己の内にある諸前提」による「類比」としての諸体験ということになる。とすれば、「自己の諸前提」と「他者の諸前提」があまりにかけ離れていた場合、他者の理解としては、「思い込み」の域を出ない可能性が未だ十分に存在するのである。

他方ガダマーの提言はそうした困難を解消する可能性を有す。ガダマーは自己における先入見を肯定的に捉えると同時に、その「理解という行為」を過去と現在の間の出来事、すなわち伝承への参入だと見なしている。そうした伝承とは、「つねにテキストが自ら求めているのとは別な意味で解釈されなければならない」、「つねにテキストの背後へ、テキストが表現している意味の背後へと遡り」つつ、解釈されなければならないという⁴。そうした私に先立つ伝承という先行理解を用いて、現在の地平にて「適用」し、理解することが重要だとガダマーは謳うのである。

こうした議論を踏まえれば、「民族文学」の他者による民族認識の理解へのアプローチとは、「直接的感受性」を保ちつつ、テキストの背後へと遡及する態度が要されることが想定されよう。これに加えてアンソニー・D・スミスは、民族性の理解には、いま結論付けたような「民族の自己認識」の遡及のみならず、その将来へと継承されたメカニズムをも視野に入れねばならないと主張している⁵。その意味で、求められ得る「民族文学」のテキストの理解とは、テキストと前後の伝承を包括的に捉えるというものであり、遡及といえども「作者の意図」へと遡るロマン主義的伝統によるものでもなく、静的な構造主義的手法によるものでもなく、

¹ 関口時正『ポーランドと他者』、みすず書房、2014年、280頁。

² サイド、エドワード『オリエンタリズム 下』、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1993年、281頁。

³ フッサール・エトムント『イデーンⅡ—Ⅱ』、立松弘孝、榊原哲也訳、みすず書房、2009年、55-58頁。

⁴ ガダマー、ハンス＝ゲオルグ『真理と方法Ⅱ』、饒田収・巻田悦郎訳、法政大学出版局、2008年、437頁、463頁、522頁。

⁵ アンソニー・D・スミス『ネイションとエスニシティ』 巢山靖司他訳、名古屋大学出版会、1999年、28頁

読者への受容にのみ焦点をあてるものでもなく、そして完全に作品から歴史を排除していないようなものでなければならないのである。

こうした条件を満たしているのがポール・リクールのミメシス論である。ミメシス論によるテキストの理解は、制作と受容を伴う循環構造であり、なおかつスミスの継承のメカニズムをも俯瞰することが出来るような、螺旋循環構造をなしている。確かにミメシス論は截然とした区別あるものとして論じることが時に困難であるし、リクールの理論において想定される読者がしばしば「理想の読者」に限定され得るという問題も孕む。しかしながら、民族の自己認識、愛国心、ナショナリズム、郷土愛といった広くエスニックな感情をテキストに追い求めるならば、むしろ「民族の理想の読者」による伝承が前提とされている点で、とりわけ後者の懸念は一転して大きな長所となり得ると言ってい。その意味でも、「民族文学」の読解とミメシス論の相性は抜群に良いと言えるだろう。

3. スミスの立場から「民族文学」を位置づける

『婚礼』とはかつて互いに反目していた知識人と農民との国家の結婚である、という共通認識がポーランドでは教育を通じてなされている。何が国家の結婚をもたらしたかという議論については、例えばアンダーソンの解釈を試みるならば、「同一舞台上」に他者であった「この農民」と「あの知識人」を同居させたことが両者の紐帯を生み出す助けとなったと考えることもできるし、ヴィカの指摘した『婚礼』のもつ「笑い」の要素やベンヤミンの「家」という舞台が大衆参加を促したなどと言うことも可能ではある。しかし『婚礼』が「民族のものである」と主張される主たる理由は、リクールによる螺旋循環的な『婚礼』の構造そのものに存在するとみる方が妥当であり、とりわけ『婚礼』に農民出身のポーランド始祖ピアストが描かれる意義は極めて大きい。それは、社会の上層と下層が文化を共有する「垂直的－平民的エトニ」が存在する（あるいは認識される）というスミスの提言を裏付ける証左でもある。加えて「共同体」を位置づけるにあたっては、こうしたピアスト王の描写をはじめとする黄金時代－歴史の利用のみならず、詩的空間－風景の利用もその有力な手段であるとスミスは提言するが⁶、確かに『婚礼』においても聖マリア教会、ヴァヴェル城、ヴィスワ川といった象徴物と並んで、詩的に描かれている「リドゥルフカ」、プロノヴィツェという『婚礼』の舞台の農村が、ポーランドという共同体を新たに位置づける大きな要素となっているといえるのである。付け加えて言えば、『婚礼』自体もまた、テキストを通じて想像される聖地のひとつと言えるだろう。

以上のような具体例、理論をもってすれば、『婚礼』に描写されている民族のエスニックな感情は、その歴史、とりわけピアスト王やその風景という民族が共有していた／していると感じるその認識に源泉を持ち、『婚礼』という民族表現の場で花開き、文学、会話、教育、刊行誌、博物館を通して継承されていくと言え、その過程で常に作品は自己とは何かを問い直し、再構成すると結論付けられる。その意味で、『婚礼』はいわば民族性を形成する鋳型である。

⁶ 同、217頁。

「民族文学」は、「英雄」、「自然」をキーワードに民族を位置づける。しかしスミスも言うように、それぞれの「民族文学」の持つ特性がどれほど似通っていても、それらのもつ重要性は民族独自の文脈の中にあることを忘れてはならない⁷。

(あさ りょうへい、東大院)

⁷ 同、229 頁。

ポーランド・ロマン主義文学における「バラードマニア」

——バラード論争とレノーレ譚

木原 慎子

ポーランド・ロマン主義は、1822年、アダム・ミツキエーヴィチ Adam Mickiewicz (1798-1855) の「バラードとロマンス *Ballady i romanse*」の刊行によって始まったとされる。バラードマニア Balladomania は、この作品を詩人たちが模倣し、相次いでバラードを創作した状況を揶揄的に表現した言葉として、一般に紹介されている。この現象は、未熟な詩人たちがロマン主義運動を阻害した事象として軽視され、これまで学術的研究対象となることは稀であった。しかし、この時期に執筆された数々のバラード作品は、当時の若い詩人たちがこの新しい文学ジャンルでの創作にいかに巨大なエネルギーを持って取り組んだかを示す証左とも考えられる。バラードマニアは、ポーランド・ロマン主義の形成過程を知る上で重要な研究主題であると言えるだろう。

バラードマニアが内包する様々な事象の中から、本報告で取り上げるのは、レノーレ譚を持つ、ステファン・ヴィトフィツキ Stefan Witwicki (1801-47) によるバラード《聖アンジェイの夜 *Wieczór Sw. Andrzeja*》(1824) の模倣疑惑をめぐる論争である。このバラードは、ジュコフスキーの《スヴェトラナ》とよく似ていたために、模倣であると批評家に批判された。この模倣論争について、ズゴジェルスキをはじめとする 20 世紀の研究者はヴィトフィツキの自作バラードであると結論づけている。つまりこの論争は、バラードをめぐる論争が必ずしもバラード詩人の未熟さのみに起因したのではなく、併せて批評家の未熟さによって惹起された側面も多分にあったことを示している。

《レノーレ *Lenore*》(1774) は、ドイツの民間伝承「死んだ花婿が花嫁を連れ去る話」をもとにビュルガーが創作した文学バラードである。レノーレ譚は、このような筋を持つ民間説話の話型を指し、ヨーロッパの広い地域で伝承されていたとされる。ロシアのジュコフスキーは、《レノーレ》をもとにして、ロシアの伝統を豊富に取り入れたバラード《スヴェトラナ》を 1813 年に発表した。

1824 年、ミツキエーヴィチの詩集とまったく同名のヴィトフィツキの詩集『バラードとロマンス *Ballady i romanse*』第 1 巻に掲載されたバラード《聖アンジェイの夜》のあらすじを以下に紹介する。

11 月 30 日の聖アンジェイの日の前夜、娘たちが将来を占っている。主人公マクリナは恋人が戦地から戻らないために一人涙を流す。真夜中、彼女は友人に教わった占いを行うと、彼女の恋人が現れる。彼はマクリナを連れ出し馬に乗って出発する。雪に覆われたステップを駆け抜け、木造の古い礼拝堂へとたどり着く。中央には棺が置かれ、喪に服した神父、女性や老人たちが葬式の歌を歌う。突然すべてが消え、小屋が現れる。中には古い棺と聖像がある。棺から吸血鬼 *upiór* が出てきて、彼女は気絶する。守護天使である白い鳩がマクリナの胸にとまり、輝きだすと、吸血鬼は光に照らされ死ぬ。

それは、マクリナの恋人であった。鳩は、魔法など使わず、神に仕えるように忠告し、飛び立つ。マクリナは祈りを唱えながら一年かけて家へと帰った。

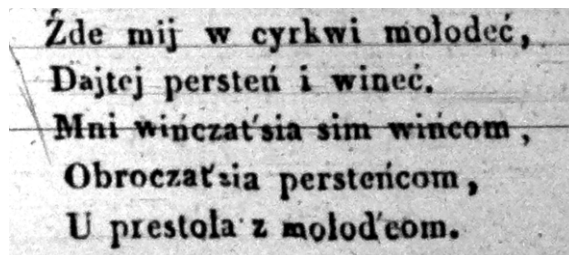
模倣論争の発端となったのは、アントニ・エドヴァルト・オディニェツ Antoni Edward Odyniec (1804-85) による《スヴェトラナ》の翻訳 (1825 年発表) を読んだ批評家ヤン・カジミェシュ・オルディニェツが、《聖アンジェイの夜》をジュコフスキーの模倣と断定する発言をしたことであった。

これを受けてヴィトフィツキは『ビブリオテカ・ポルスカ *Biblioteka Polska*』誌において、「ビュルガーが《レノーレ》の作者であり、ジュコフスキーが《スヴェトラナ》の作者であるように、私は《聖アンジェイの夜》の作者である。(…) 共通するプロットやモチーフは民謡から取られたもので、ジュコフスキーのものでもヴィトフィツキのものでもない。(…) ジュコフスキーが創作したアイディアや情景は本作には登場しない」と自作バラードであることを強調し、反論した。

また、ヴィトフィツキは、ジュコフスキーの模倣ではないという証拠として、ジュコフスキーが用いていない部分の民謡の原詩を掲載した。次に示すように、原詩は、ヴィトフィツキがバラードの中で民謡の翻訳として挿入した歌とほぼ同一の内容であった。

〈バラードからの引用 (左) と『ビブリオテカ・ポルスカ』の記事にヴィトフィツキが掲載した民謡の原詩 (右)。筆者がポーランド国立図書館にてマイクロフィルムより撮影したもの。〉

Czeka w Cerkwi mój młodzieniec,
Dajcie siostry pierścień, wieniec;
Ja uwienczę się tym wieńcem,
Tym zaręczę się pierścieniem,
U ołtarza z mym młodzieńcem.



Żde mij w cyrkwi młodec,
Dajtej persteń i winec.
Mni winczą'sia sim wincom,
Obroczą'sia persteńcom,
U prestola z młod'com.

ツェルキェフで待ってる私の恋人、
娘さんたち、指輪、花輪をちょうだいな。
私は花輪で着飾るわ、
その指輪で婚約するわ、
祭壇の前で、恋人と。(Witwicki 1824:117)

これに対し、オルディニェツは、「《レノーレ》と《スヴェトラナ》は全く似ていないため比較対象にはならない」と述べ、ヴィトフィツキの主張を一蹴した。

一方、批評家 F. S. ドモホフスキは、自身が編集する『ビブリオテカ・ポルスカ』誌に掲載したオディニェツ詩集の論評において、ヴィトフィツキの主張を支持し、次のように、ビュルガー、ジュコフスキー、ヴィトフィツキの比較を行った。

〔《スヴェトラナ》と同様、《レノーレ》においても、〕深夜に娘の恋人が娘を連れ出す。ただし、ビュルガーはそれを、娘が神を罵り、絶望したことに対する罰として描

いたのに対し、ジュコフスキーは、東方の三賢王の日の前夜の魔力によるものとして描いた。ビュルガーにおいては、レノーレは死に、バラード全体が恐怖やおぞましさに含まれている。ジュコフスキー氏は、スヴェトラナの冒険をすべて夢の中の出来事であったとし、結末には恋人が訪れ、幸福に幕を閉じる。ヴィトフィツキ氏も、同じ民謡をもとに、《スヴェトラナ》ととてもよく似たバラードを書いた。ヴィトフィツキ氏のマクリナの場合は夢ではなく現実であり、また葬式の歌を挿入した点で異なっている。(Dmochowski 1825:272)

以上が、論争の一連の流れである。

ジュコフスキーは、実際にレノーレ譚を持つロシアの民謡には触れていないとされているが、ポーランドの詩人は農村部で民謡に触れていたと思われる。例えば、1819年にクリスティン・ラフ・シルマ Krystyn Lach Szyrma は、ポーランド固有のレノーレ譚を散文の形で紹介している。彼が紹介したレノーレの物語は、墓で馬と恋人が消える場面までほぼレノーレと同様である。スラヴのレノーレ譚にはさらに、娘が一人、小屋の中で棺の中の死人に襲われるというモチーフが加わることを紹介している。これが、《スヴェトラナ》と《聖アンジェイの夜》の類似点が多い理由となっていると考えられる。

またミツキューヴィチは、レノーレ譚を持つ自身の《逃避行。バラード *Ucieczka. Ballada*》(1832) に、次のような説明を添えている。

この物語は、すべてのキリスト教国の民に知られるものである。詩人たちは、それを多彩に色付けしてきた。ビュルガーは、それをもとに名高い《レノーレ》を創作した。ドイツの民謡を知らないので、ビュルガーがどれほど内容や文体を変えたのかは分からない。このバラード〔逃避行〕は、かつて私が、リトアニアにて、ポーランド語で歌われているのを聞いた歌をもとに創作したものである。内容と構造は忠実に保持したが、頭に記憶している民謡の詩は少なく、それらをもとに、文体を形作った。(Zgorzelski 1962:176)

文学バラードは、その根底に、民間伝承バラードの模倣という特徴を持っている。そのために、バラードでは類似したモチーフや主題が様々な作品に繰り返し現れる。1832年にミツキューヴィチが上記のように創作の背景を丁寧に説明していることから分かる通り、1825年の論争当時は、バラードという文学ジャンルが生まれて間もない時期で、バラードのこのような性質がまだ広く理解されていなかったはずである。ヴィトフィツキがジュコフスキーの作品を盗用したかのような発言がなされた原因は、批評家の、このジャンルに関する理解が浅かったためと考えられる。

その一方で、ドモホフスキが《レノーレ》、《スヴェトラナ》、《聖アンジェイの夜》の違いを比較したのは、極めて的を射た分析であった。栗原は「西スラヴと南スラヴにおける”レノーレ”譚」(2001)の中で、ミツキューヴィチの《逃避行》をはじめ、スラヴ圏に残る様々なレノーレ譚と同じ話型の民謡、文学バラードを集め比較している。その際、「死者を墓から呼び出す方法」や「結末」といった物語の構成要素に着目して比較している。ドモホフスキも同様に構成要素に着目して違いを論じていることから、バラードの性質をよく

理解していたと言える。

カジミエシュ・ヴィカは、民衆文学というものには著者がおらず、盗作 plagiat によって成り立っていたことを指摘している (Wyka 1974:5)。詩人が公的な、書かれた文学としてバラードを書く上で、模倣という特徴が付きまとうのは、民衆文学の世界へと詩人が自ら分け入って行った状況があるからである。そのような観点から考えると、ヴィトフィツキと批評家オルディニェツ間の論争は、ポーランド・ロマン主義の形成を考える上で、末梢的議論では決してない。この論争は公的文学と民衆文学が出会ったからこそ生まれたその象徴的事象であり、ポーランド文学が古典主義からロマン主義への過渡期にあったことを示す重要な事例と言えるだろう。

(きはら まきこ、東大院)

主要参考文献

- ・ Dmochowski Franciszek Salezy (?), *Literatura. Poezje Antoniego Edwarda Odyńca Tom pierwszy. Literatura. Rozbiór pierwszego tomu poezji p. Odyńca (dokończenie)*, [w:] Biblioteka Polska 1825, t. 3, s. 226-39, 267-76.
- ・ Odyniec Antoni Edward, *Poezje t. 1, Ballady i legendy*, Wilno 1825.
- ・ Ordyniec Jan Kazimierz, *O pierwszym tomie Odyńca, z krótką wzmianką o poezji narodowej*, [w:] Dziennik Warszawski, 1825, t. 1, nr 3, s. 434-48.
- ・ Ordyniec Jan Kazimierz, *Do redakeji Gazety Koress. i Rozmaitości Warszawskich*, [w:] Rozmaitości Warszawskie, 1825, nr 34, s. 267-9.
- ・ Ordyniec Jan Kazimierz, *Warszawa (Artykuł nadesłany)*, [w:] Gazeta Polska, 1827, nr 248, s. 975.
- ・ Lach Szyrma Krystyn, *Uwagi nad balladą Bürgera, Leonora*, [w:] Pamiętnik Naukowy, 1819, t. 2, s. 275-82.
- ・ Witwicki Stefan, *Ballady i romanse t. 1, 2*, Warszawa 1824, 25.
- ・ Witwicki Stefan (Autor ballady *Wieczór Ś. Andrzeja*), *Odpowiedź na zarzut uczyniony przez panów wydawców Dziennika Warszawskiego*, [w:] Biblioteka Polska, 1825, t. 3, s. 192-4.
- ・ Wyka Kazimierz, *Pani pana zabiła*, Ludowa spółdzielnia wydawnicza, Warszawa 1974.
- ・ Zgorzelski Czesław, *O stosunkach literatury polskiej i rosyjskiej w latach 1810-1830*, [w:] Nauka i Sztuka, 1948, t. 9, s. 64-79.
- ・ Zgorzelski Czesław, *Biblioteka narodowa. Ballada polska*, Zakład Narodowy imienia Ossolińskich, Wrocław 1962.
- ・ 栗原成郎「西スラヴと南スラヴにおける”レノーレ”譚」『西スラヴ学論集 2001 年(第 4 号)』2001 年、pp. 7-23.

イアキンフ・ビチューリンの中国研究

畔柳千明

19世紀前半のロシアでは、東洋学に新たな展開が見られた。サンクトペテルブルク大学に東洋学講座が設置されるなど、教育の機会の増加とともに、クラブロートやセンコフスキーらロシア国内での東洋学者が存在感を増した。彼らは、いかなる動機で東洋に関心を持ち、何を研究したのか。本発表では、ロシア最初の中国研究者の一人である、イアキンフ・ビチューリン Иакинф Бичурин（1777-1858）の著作の分析を試みた。

1. イアキンフ・ビチューリンについて——伝記的事実

イアキンフの伝記については、本人が自身の経歴や家族について多くを書き残さなかったこともあって、不明な部分も残っている。判明している伝記的事実のうちまず特筆されるべきは、彼が「北京宣教団」に第9次宣教団長として参加し、1809年から1821年まで北京にいたことである。「北京宣教団（Российская / Русская духовная миссия в Пекине）」とは、数名の聖職者と学生が北京に派遣され、約10年滞在する18世紀以来の慣行である。彼らの役割が宗教的なものに限定されないことは既に知られている。イアキンフが団長を務めた時代には、すでに宣教団は中国語・満洲語・モンゴル語の専門家育成の場として機能していた。宣教団経験者の多くは帰国後、外務省で勤務した。また植物学者や医者、画家などが派遣されることもあった。

また、彼がカザン神学校で教育を受けた点も重要である。イアキンフは1777年、カザン県の教会勤務者の家に生まれ、8歳のときに親元を離れてカザン神学校に入学したことが判明している。イアキンフ在学時のカザン神学校では教育制度改革が遂行されていた。当時のカザン大主教アムヴローシイ・ポドベドフは、異族人出身の生徒たちをそれぞれの母語で説教できる人材に育てることを目指した（イアキンフ自身チュヴァシ人の血を引いているとされる）。カザン神学校で、イアキンフは神学、哲学だけではなく、物理、世界史、地理学、数学など世俗の学問を学び、ラテン語、ギリシャ語、フランス語、ドイツ語を習得した。カザン神学校の学生文集の中に残された、彼がギリシャ語とロシア語で綴ったアムヴローシイを讃える詩や、ヴォルテール『アンリヤード』のロシア語訳から、彼はここで啓蒙主義的な思想に親しんだと推定されている。彼は19世紀ロシアに特徴的な教会知識人の一人であった。

2. イアキンフ・ビチューリンの中国研究——中国哲学に関する著作から

では、イアキンフはどのような形で中国への関心をあらわしたのか。本発表においては、中国哲学に関する著作を中心に検討した。イエズス会士による中国哲学研究はよく知られているが、もとより彼らの場合問題の中心は、中国哲学が伝道に有用か否かという点にあった。一方北京宣教団は、イエズス会士とは違いキリスト教の布教を行わないため、中国哲学研究はあくまでも地域研究の一環である。彼らのそうした中国哲学理解は、ロシア中国学に特徴

的なものであるように思われる。

イアキンフの生前公刊された著作の中で中国哲学に言及するのは、まず『第一原理の図、あるいは物理・道徳法則の起源について (Изображение первого начала, или о происхождении физических и нравственных законов)』である。本著作は、宋の周敦頤が著した『太極図説』の朱熹による注解『太極図説解』、及び周敦頤『通書』のロシア語訳であり、N. ポレヴォイの『モスクワ・テレグラフ』誌上に1832年の11月から12月、3度に渡って掲載された。彼の「儒教」理解はその後も基本的にこの著作に基づく。

同じく中国哲学に言及するのが、1840年に出版された『中国、その住民、道徳、慣習、啓蒙 (Китай, его жители, нравы, обычаи, просвещение)』である。本書はイアキンフの既発表論文を集めたものであるが、中国哲学についての章は最後に置かれており、彼が結論とした部分であると考えられる。

イアキンフによれば、ヨーロッパにおいて、中国の民衆が教育面で西欧よりも優れていることは認められているが、宗教面に関しては、否定的に評価されることが多い。それは、彼らが「世界で唯一——ヨーロッパにとっては全く驚くべきことに——その哲学が宗教と最も緊密な関わりを持っている国民」だからなのだという。「ここで私が想定するのは、『儒教』と呼ばれる、国家的・国民的宗教のことである」¹。

イアキンフは儒教について次のように述べている。「この宗教の内的構造は純粋な哲学的原理、しかも学校での教育を通じて、水がスポンジに浸み込むように全ての階級の人びとに浸透した、まさにその哲学に基づいている。反対に、この哲学の古くからある考えの大部分は宗教的原理、中国国民が国民として最初に形作られるのとともに生じた、まさにその宗教から成っている」²。つまりここで彼は、儒教に哲学と宗教両方の性質があることを示している。「儒教」に対応する訳語は、現代ロシア語では「Конфуцианство」であるが、この時代にはまだ定着していなかった。そこでイアキンフが自ら考案した訳語が「религия ученых」つまり「学者たちの宗教」である。

儒教を「宗教」とするこの訳語は、例外的なものである。イアキンフ以後のロシアの中国学者は儒教を宗教とはみなしていない。例えば中国学者のワシーリー・ワシリエフ(1818-1900)は、1873年の著作『東洋の宗教——儒教、仏教、道教』において、儒教が宗教でないのは自明であり、儒教者は無神論者であるとして、儒教とキリスト教の懸隔を強調した。「神という名称は儒教にはない。その代わり創造の力は天(небо)、地(земля)、人(человек)のもの」であり、ワシリエフによれば儒教には超越的存在としての神(Бог)は存在しない³。

ところで、儒教が宗教か否かという問題は、中国社会に対する評価自体に関わる。ワシリエフによれば、「西洋の宗教は科学や啓蒙に関わる問題を扱わなかった。それゆえ啓蒙が発

¹ Иакинф Бичурин. Китай, его жители, нравы, обычаи, просвещение. СПб.: в типографии Императорской Академии наук, 1840. С. IV-V.

² Там же. С. V.

³ Васильев, В.П. Религия Востока: Конфуцианство, буддизм и даосизм. Изд. 4-е. М.: ЛЕНАНД, 2015. С. 160. 初版は1873年。

展し得たのである。一方、東洋の宗教は学問から出て、最初は単なる教えであった。それゆえ学問は、学問が宗教に変わったときあった発展段階にとどまらざるをえなかった」⁴。つまりワシリエフの見方では、西洋では科学や啓蒙といった事柄がキリスト教の管轄外にあったため学問が自由に発展したのに対し、中国では儒教は元々学問であるのが宗教になったため、学問が自由に発展することができなかったという。さらに彼は、これを中国の停滞と没落の原因であると考えている。すなわち中国は静止した社会であり、儒教がその原因であるということになる。

しかしイアキンフにとって、儒教は「宗教」でありかつ「哲学」でもあった。彼は中国哲学を説明する際に「神」という言葉を用いる。「『易経』には神（Бог）と、自然（природа）についてすなわち物理的・道徳的世界の諸法則についての概念が含まれている」⁵。

イアキンフの理解では、儒教においてその神は複数の「君子（премудрый）」あるいは「聖人（святой）」たちの形をとって現れる。君子の完全さは、「学問教育を受け、道徳を常に高めることを通じて達成することもできる」⁶。

現代ロシアの研究者コブゼフは、「君子」を、学べば誰もが神と同様にふるまえるという考え方であるとし、これは神の超越性を剥奪するものであり、後のワシリエフによる無神論的儒教理解を理論的に先取りしたものとしている。

しかし発表者は、イアキンフは儒教をあえて「宗教」と訳したと考えた。彼は中国学者である前に、18世紀末としては高水準の教育を受けた修道司祭であった。これをあえて強調するのは、特にソ連期の研究において、聖職者としての仕事への彼の不熱心さが過度に強調されてきたからである。

しかし近年ロシア国内ではこうしたイアキンフ像は修正されつつある。例えば現代ロシアの研究者カレージナは、イアキンフが北京で作成した正教徒のための中国語のカテキズムの分析を通じて、彼の聖職者としての職務の実態を解明している。

イアキンフは「神」という言葉で、中国哲学における至高の存在を表す。彼は儒教を彼の知るキリスト教、つまり正教との比較で捉えたうえで、両者の間に共通点を見出しており、ここにはイアキンフの中国への共感が表れている。

こうした共感、同時代の東洋学者にも共有されていた。例えばモンゴル学者 O. コワレフスキ（1800-1878）は、「ヨーロッパ人のアジアとの遭遇について」と題した講演の中で、「教育と社会関係の成熟とともに、全人類は、肉体的にも知的にも自らの必要が満たされ、ただ一つの有機体へと少しずつ融合しつつある」⁷と述べている。つまり、コワレフスキはヨーロッパとアジアが一つになる未来を想像したのである。

⁴ Там же, С. 17.

⁵ Иакинф. С. 399. 大文字で始まる Бог は一神教の唯一神の意。

⁶ Там же. С. 403.

⁷ Ковалевский, О. О знакомстве европейцев с Азией // Обзорение преподавания наук в Императорском Казанском университете на 1837-1838 учебный год. Казань: В университетской типографии, 1837. С. 29.

3. 結論

当時のヨーロッパでは、中国はヨーロッパとは全く異なる歴史法則に従っているとして、その社会は停滞していると考えられていた。イアキンフは儒教を硬直化した学問体系としてではなく、その哲学でも宗教でもない独自の論理を提示することで、中国に対する偏見に反論することを意図したと考えられる。イアキンフの中国学とは東洋に何か新奇なもの、ヨーロッパとは違うものを探だけでなく、共通点を探るものであった。

(くろやなぎ ちあき、東大院)

画家イリヤ・レーピンの滞仏期作品を再評価する試論

早川萌

はじめに

画家のイリヤ・レーピン（Илья Ефимович Репин, 1844-1930）はロシア帝政期からソ連時代にかけて主にロシアで活動し、代表作《ヴォルガの船曳き》（1870-1873 年、【図 1】）とともに、ロシアの庶民の姿をありのままに描くことで社会体制を批判した画家として知られている。最近の研究では、ガリーナ・チュラクがレーピンの代表作二点を《ヴォルガの船曳き》とそれに続く《クールスク県の十字架行進》（1881-1883 年、【図 2】）としている¹。しかし両作品の間の時期に描かれた幻想的な絵画《水底の王国のサトコ》（1876 年、【図 3】以下《サトコ》）は、画家自身がこの作品を批判したことから失敗作とされており、外国滞在期に描かれたこともありレーピンらしくない作品と考えられてきた。

本発表では、外国滞在期のレーピンの思想の変化に注目することで、その時期の代表作《サトコ》が単なる失敗作では片付けられない野心的な作品だったという見方を示し、その後の作品にも引き継がれる上達が《サトコ》にみられることを指摘する。

レーピンの外国滞在

1864 年に美術アカデミーの学生になったレーピンは、1871 年に卒業試験ともいえる学内最高位のコンクールで大金メダルを受賞すると、賞の特典として官費で外国に派遣された。1873 年 5 月にサンクトペテルブルクを出発したレーピンは、ウィーンやイタリア各地を周遊し、同年秋から 1876 年 6 月の帰国まで約 3 年をパリで過ごした。この時期の重要な変化として、当初は絵画のテーマ性を重視していたレーピンがパリで芸術観を変え、テーマよりも表現手段（色彩など）を重視するようになったことがある。

サトコの物語

絵画《サトコ》の元となったブイリーナの筋は次の通りである。

裕福な商人サトコは航海中に船を降ろされて海の王に会う。持っていたグースリを奏でたサトコは海の王に気に入られ、その娘と結婚することになる。サトコに聖人からお告げが下り、花嫁候補の娘を 300 人断って次に出てくる黒髪の娘を選び、彼女に触れずに一晚過ごすよう指示される。聖人の言葉を守ったサトコは、夜が明けて目覚めると娘と同じ名前の川で目覚め、故郷に帰る。

レーピンがこの題材で描こうとした絵画の初期構想では、海の王国に心惹かれながらも故

¹ ガリーナ・チュラク「イリヤ・レーピン——「爆発する無限のエネルギー」を持った画家——」『国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展』（アートインプレッション、2012 年）、11-16 ページ]

郷を忘れないサトコを自分自身と重ね合わせ、華麗な西欧風の娘ではなく黒髪のロシア娘を選ぶ様子を描くと記しており²、完成作はこれを反映している。

画家の自己批判

先行研究に頻出し、《サトコ》への低評価の根拠となる自己批判は、スターソフ宛書簡に登場する。

内密のこととして打ち明けると、私は自分の絵画《サトコ》にひどく幻滅していて、どんな喜ばしいことがあろうと絵を破棄してしまいたい……。[中略] どうか、お願いします、誰にも何も言わないでください。[中略] ただ恥ずかしく悔しく、ただの練習でそれ以上の何もありません。ざっと見てどこにも少しの思想もありません。³

スターソフに向けては《サトコ》を強く否定する一方、レーピンは1876年に美術アカデミーの会員の称号を申請する際にこの作品を提出している。《ヴォルガの船曳き》を提出した際には認められなかった称号が《サトコ》に対して認められたことから、当時のアカデミーの基準で《サトコ》が《ヴォルガの船曳き》より高評価だったと考えられる。

批判のポーズ

《サトコ》は完成前から皇太子アレクサンドルへの売約が決まっていたが、レーピンはこの作品への批評を気にしていた。同時代評を読んだレーピンはスターソフ宛書簡で複数の新聞を名指しして怒気を表しつつ《サトコ》の擁護を頼み、スターソフは《サトコ》に不満だったものの、頼みを受けて当初の予定を変更してレーピン擁護に回ったとされる⁴。このレーピンの行動からは、スターソフの筆の力に頼っていた状況が窺える。学生時代はアカデミー内の評価だけで十分だったレーピンだが、アカデミー卒業に伴いアカデミーの外での評価(雑誌・新聞評)も見過ごせなくなった。レーピンはスターソフの《ヴォルガの船曳き》称賛によって脚光を浴びたということは生前から指摘されており⁵、アカデミー外でのレーピンの地位はスターソフに支えられていたと考えられる。

《サトコ》公開前後のレーピンの諸方面への書簡を通覧すると、画家仲間のワシリー・ポレーノフ宛書簡で《サトコ》に言及していたことが分かった。ここでレーピンは一通り《サトコ》

² Письмо И.Е. Репина к В.В. Стасову 23 декабря 1873.// Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и В.В. Стасов. Переписка. Т.1. М.-Л.: Искусство, 1948. С.81-82.

³ Письмо И.Е. Репина к В.В. Стасову 26 марта 1876.// Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и В.В. Стасов. Переписка. Т. 1. С. 130-131.

⁴ Письмо И.Е. Репина к В.В. Стасову 16 декабря 1876.// Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и В.В. Стасов. Переписка. Т. 1. С. 145, Плотников В.И. Картина «Садко» и борьба за Репина в Русской художественной критике 1870-х годов. // Проблемы развития русского искусства. Выпуск 3. Л.: Академия Художеств СССР, 1972. С. 41.

⁵ Дм. Ст. Выставка картинъ въ академіи художествъ. II.// Русскій міръ. 12 ноября 1876. №280.

への同時代評に目を通した感想として、より厳しい評価を予想していたと記している⁶。しかしこの書簡でレーピンが名前を挙げている『ルースキー・ミール』は、スターソフ宛には名指しして不満を述べていた新聞である。

《サトコ》公開前のレーピンは、テーマより表現を重視して描いた作品がロシアの批評家に認められないと予想しており、アカデミー外での評価も無視できなくなってきた状況下で、スターソフによる擁護を必要としていた。パリ時代のレーピンは、ロシア美術のテーマ性偏重を批判してスターソフとの関係を一度冷え込ませたが⁷、思想重視の観点から自分の作品を批判すればスターソフと同じ芸術観に改心したことを示せる。つまり、長々とした批判はスターソフの批判を避ける、あるいは最低限「誰にも何も言わないでください」という頼みを聞いてもらうための方便だったと考えると他の発言とも整合性が取れる。

同時代に認められた点

従来の《サトコ》研究ではレーピンの自己批判やスターソフの不満が取り上げられてきたが、それ以外の同時代批評を探すと好意的な評価も見付かった。

高く評価された要素の一つは水中世界の現実感である。管見の限り、《サトコ》は西洋絵画作品で水中を描いた初の例であり、珍しくもあっただろう。真に迫った水中描写を可能にしたのは水生生物を生きたまま展示するアクアリウムで、その技術はロシアに先駆けてフランスで進んでいたものである。

もう一つ好評だったのは女性達の華やかな美だが、これはレーピンがロシアを離れる前から魅力を感じていた題材であった。レーピンを有名にした《ヴォルガの船曳き》の初期構想では、彼が何よりも魅力的だと思った令嬢達とぼろぼろの船曳きの対比を絵の中心にしていたが、師と仰ぐグラムスコイや周囲の画家仲間の助言で令嬢達を外した⁸。レーピンが《サトコ》で着飾った女性の華やかさを描いたのは、ロシアを離れていたからこそ可能だったことだといえる。

水中風景や華美な女性像は、絵の表現よりも作者の思想を重視するロシア画壇では描けず、ロシアを離れることで取り組めたことである。帰国後にこの二点の成果を認められたことから、《サトコ》におけるレーピンの挑戦は失敗というよりむしろ成功といえよう。

《サトコ》とその後の作品のつながり

《サトコ》に不満を持った批評家達も満足したのはレーピン帰国後の作品《クールスク県の十字架行進》で、《ヴォルガの船曳き》と同じように同時代のロシアの人々を描いているが、両者の間には技術的な違いがある。それは、多人数を一つの画面にまとめる構合力、多人数

⁶ Письмо И.Е. Репина к В.Д. Поленову 8 декабря 1876.// Репин И.Е. Письма к художникам и художественным деятелям. М.: Искусство, 1952. С. 22.

⁷ Письмо И.Е. Репина к В.В. Стасову 8 июля 1874.// Письма И.Е. Репина. И.Е. Репин и В.В. Стасов. Переписка. Т. 1. С. 100.

⁸ Репин И.Е. Далекое близкое. 6-е изд. М.: Издательство Академии художеств СССР, 1961. С. 219-222.

の描き分け、そして光の表現の上達である。

パリに來た当初はテーマを重視していたレーピンが、色や表現に目を向けるようになり、空間の奥行きや多人数の描写に成功した例として《サトコ》を捉えると、《クールスク県の十字架行進》はロシアの批評家好みのテーマを使い、この部分の上達を引き継いだ絵と捉えることができる。

(はやかわ めい、国立国会図書館)



【図1】イリヤ・レーピン《ヴォルガの船曳き》1870-1873年、油彩・カンヴァス、131.5 × 281cm、サンクトペテルブルク、国立ロシア美術館



【図2】イリヤ・レーピン《クールスク県の十字架行進》1881-1883年、油彩・カンヴァス、178.0 × 285.4cm、モスクワ、国立トレチャコフ美術館



【図3】イリヤ・レーピン《水底の王国のサトコ》1876年、油彩・カンヴァス、322.5 × 230cm、サンクトペテルブルク、国立ロシア美術館

フロレンスキイの天動説 ——無限と不連続性を中心に

細川瑠璃

ロシアの思想家パーヴェル・フロレンスキイ（1882-1937）は、著書『幾何学における虚数性 Мнимости в геометрии』（1922）の中で地動説を否定し、天動説の復権を主張している。数学と科学の知識を十分に持ち合わせていたと考えられるフロレンスキイが、20世紀の初頭に天動説を主張したのは何故か。フロレンスキイは天動説を唱えることによって、いかなる宇宙観を示そうとしたのか。この問いに答えることが、本研究及び報告の目的である。

フロレンスキイは、モスクワ大学物理数学部で数学者ブガーエフ（1837-1903）らに数学を学んだが、卒業後はモスクワ神学校に進学し、1911年にロシア正教の司祭となった。『幾何学における虚数性』が発表された1920年代、フロレンスキイは数学や神学への関心に加えて、芸術や科学技術など様々な分野とも深く関わっていた。1921年から1924年まで、フロレンスキイはヴフテマス（国立高等芸術工芸工房）で空間論の講義を担当し、マコヴェツという芸術家グループに加わった一方で、電気技術や化学の研究も行っていた。フロレンスキイの天動説の主張は、フロレンスキイのこうした関心や活動の広さを考慮に入れた上で、フロレンスキイの様々な分野に関する思想とも比較しながら分析する必要がある。

『幾何学における虚数性』は全部で9章から成る。内容は、1章から8章までと9章で大きく分かれる。

1章から8章では、虚数の性質の解釈について論じられる。フロレンスキイは、虚数を幾何学的に捉える方法として、実数と虚数を平面の表面と裏面とする解釈を示している。虚数の領域と実数の領域を視覚的に示し、両方の領域がともにあって初めて一つの全体を成すのだということを示すことが、『幾何学における虚数性』の1章から8章でのフロレンスキイの狙いである。

9章では、1章から8章までで論じられた虚数性と、ダンテの『神曲』とその中に表れているアリストテレスの宇宙観、アインシュタインの相対性理論が組み合わされ、フロレンスキイの独自の天動説が展開される。

9章の前半部分では、『神曲』におけるダンテの旅の軌跡の分析を通して、『神曲』の宇宙観が閉じた非ユークリッド空間であるということが述べられる。このことが意味しているのは、『神曲』の空間は、延々と広がるユークリッド空間とは異なり、一つの形を成すものとして、全体として捉えることができるということである。フロレンスキイは、アインシュタインの一般相対性理論においても、宇宙は閉じた三次元の球面であることが導かれることを指摘し、『神曲』の宇宙観が現代科学の裏付けを得たとする。フロレンスキイが『幾何学における虚数性』の9章で非ユークリッド幾何学を持ち出したことは、フロレンスキイの空間論と関係がある。フロレンスキイの考えでは、空間はユークリッド空間だけではない。ユークリッド空間は数多くある空間の一形態にすぎず、触覚や視覚などの知覚や感情、神秘的経験といっ

たものまで、それ自身の空間を要求すると考えている。また、フロレンスキイは、それぞれの空間には、それを記述するのに適した幾何学があるとしている。フロレンスキイは、ユークリッド幾何学では記述できないものを記述できる可能性を非ユークリッド幾何学の中に見出している。フロレンスキイは『幾何学における虚数性』において非ユークリッド幾何学を用いて宇宙を記述しようとしているが、非ユークリッド幾何学を選択した時点で、フロレンスキイは初めからユークリッド的な、あるいはユークリッド空間を想定したコペルニクス的な世界観を退けているのであり、より正確に言えば、ユークリッド幾何学では記述できずにとりこばされていたものを記述しようとしていることがわかる。

9章の後半部分で、フロレンスキイは天動説を主張する。フロレンスキイが天動説を主張する際の論法は、次のようなものである。天動説をとっても、地動説をとっても、起こる現象に違いはない。その前提の上で、フロレンスキイとほぼ同時期に地動説と天動説について論じた数学者ポアンカレ（1854-1912）や物理学者マッハ（1838-1916）は、地動説のほうが自然現象の一貫性を記述するのに便利であるから、地動説を採用すべきであるとした。同じ前提を共有した上で、フロレンスキイは、天動説を採用する。それは、天動説を用いることによって記述しやすくなる何ものかがあるからである。それでは、フロレンスキイが天動説を用いて記述すべきであると考えた内容とは何であろうか。

フロレンスキイの数学に関する思想の中で核となっているのは、連続性と不連続性の対立である。フロレンスキイは、ルネサンス以降、特に19世紀において、連続性の概念があらゆる分野で支配的になっており、不連続性が軽視されていると指摘する。だが、全ての現象を連続性によって説明できるわけではない。それどころか、連続性とは不連続性の特殊な一例にすぎず、不連続性は連続性に先立つ。不連続性は、変化の限界が規定されているため、全体としての形を有している。一方で、連続性は変化の限界を持たず、それゆえに全体としての形が欠如している。フロレンスキイは、不連続性の持つ全体性、複数の要素が全体として形を成すことを、美であるとしている。不連続性はまた、数えられるもの、思考の或る原型としての数という概念とも結びつく。フロレンスキイは、不連続性、形、数、全体という概念を重視すべきであると主張する。

連続性と不連続性の対立と同様にフロレンスキイの思想において重要であるのは、数学者カントール（1845-1918）の集合論に基づいた、潜在的無限と現実的無限の対立である。アリストテレスにおいては、無限は連続的過程である潜在的無限としてしか成立し得ない。一方でカントールの考えに従えば、実数全体のような無限の数でさえ、集合として、一つの形を成すものとして捉えることができる。この考えにおいては、いかなる有限定数よりも大きな定数のような、数学的実在性をもつ現実的無限の存在を認めることができる。無制限な変化が可能であるためには、変化のための不変の領域が必要であるという考えから、フロレンスキイは、不連続性が連続性に先立つように、現実的無限が潜在的無限に先立つとした。フロレンスキイが現実的無限について論じたのは、単に数学的議論のためだけではない。フロレンスキイは著書『真理の柱と礎』（1914）の中で、真理＝神を、有限な無限であり、同時に無限な有限でもある存在、つまり現実的無限であるとしている。フロレンスキイの考えにおいて、現実的無限の存在を認めることは、神の存在を認めることである。

『幾何学における虚数性』で展開される天動説は、アリストテレスやプトレマイオスの天動説そのものではなく、フロレンスキイ独自の天動説である。アリストテレスの天動説では、

宇宙は有限である。それに対し、フロレンスキイの解釈したダンテの『神曲』に基づく天動説では、宇宙は閉じた非ユークリッド空間である。それゆえ、地表の上をずっと歩き続けても端に辿り着くことはないように、フロレンスキイの宇宙もまた有限ではあるがはてがない。どれだけまっすぐに進もうと、連続的プロセスによってそのはてに到達することはない。従って、非ユークリッド幾何学を導入したフロレンスキイの天動説では、地上的領域を無限に連続的に進んでいっても、閉じた地上的領域から出ることはできず、天上的領域へ辿り着くことはない。境界を超えて天上的領域へ入るためには、フロレンスキイの説明によれば、光速を超えて空間を破壊したり、ダンテとウェルギリウスのように反転したり、なんらかの不連続な変化を経なければならない。こうした不連続性によって結び付けられた天上的領域は、地上的領域からみれば現実的無限である。

フロレンスキイの天動説は、不連続性と現実的無限という概念を、非ユークリッド幾何学を用いて視覚化したモデルである。フロレンスキイが、地動説を用いて説明される自然現象の一貫性よりも優位に立つ真実であるとみなしたものは、不連続性と現実的無限の概念であり、また、フロレンスキイが神を現実的無限であるとしていたことを考慮すると、神の存在を面の表と裏のように人間との不連続で表裏一体な関わりの中で捉えることを、視覚的に示したものである。

(ほそかわ るり、東大院)

ロシア語における名詞句内要素の語順導出の試み*

宮内拓也

1. はじめに

元来、冠詞と名詞から成る句は、NP (Noun Phrase) であるとされてきたが、Abney (1987) 以来、DP (Determiner Phrase) として再分析され、現在ではこの分析が主流となっている。ただし、冠詞のない言語における名詞句¹も DP であるのかという点については、未だ解決されていない問題である。冠詞のないスラヴ諸語の名詞句についても、Лютикова (2010) などが DP を認めている一方で、Bošković (2009) などは NP であると主張している。

本稿では、上記の問題の一環として、束縛現象からロシア語の名詞句の構造を NP であるとした Miyauchi (2014)、宮内 (2015, 2016) を前提にして、ロシア語の名詞句内に生起する修飾語の語順について、形式意味論、特にタイプ理論の観点から検討する。

2. 名詞句内の要素の語順

2.1. 名詞句内の要素の共起関係と語順

本稿で名詞句内の要素と呼ぶものは以下 (1) で示すものを指すこととする。

(1) 本稿で扱うロシア語における名詞句内の要素

- | | |
|----------------------|--------------------------------------|
| a. 指示代名詞 (этот, тот) | b. 量化詞 (каждый, любой, всякий, весь) |
| c. 所有代名詞、所有形容詞 | d. 形容詞 |

名詞句内の要素の共起関係と語順は以下 (2) のようにまとめることができる。

(2) ロシア語における名詞句内の要素の共起関係と語順²

- | | |
|-------------------|--------------------|
| a. Poss = A | b. Q > Poss = A |
| c. Dem > Poss = A | d. *Q Dem / *Dem Q |

* 本研究は JSPS 科研費 (課題番号: 25284083、研究代表者: 浅原正幸) の助成を一部受けている。また、本稿の内容は以下の口頭発表に基づいている: 「ロシア語名詞句の統語構造と名詞句内の要素の語順」、日本ロシア文学会関東支部春季研究発表会、2016 年 6 月 4 日、早稲田大学。より詳細な議論は宮内 (2016)、宮内 (印刷中) を参照のこと。

¹ 本稿では、「名詞句」とは、名詞および限定詞等によって構成される句、つまり、伝統的な意味でのいわゆる名詞句を指して用いる。以降、NP と DP を特に区別する必要がない、もしくは区別できない場合に、NP や DP のカバータームとして名詞句という用語を用いることとする。

² ここで、Poss は所有代名詞と所有形容詞、A は形容詞、Q は量化詞、Dem は指示代名詞をそれぞれ表している。以降も同様に用いる。また、「=」は左辺と右辺の要素が交換可能であることを、「>」は左辺の要素が右辺の要素に先行することをそれぞれ示している。

(2)で示した名詞句内の要素の共起関係と語順について、以下で具体例をみる。(3)に示すように、Poss と A は交換可能である。

- (3) a. Колин последний фильм b. последний Колин фильм
 Kolya's latest film latest Kolya's film
 「コーリヤの最新の映画」

Q と Poss については、Крылова и Хаврони́на (1984: 36) や Bailyn (2012: 47) にあるように、Q は Poss に先行しなければならない。

- (4) a. все мои друзья b. *мои все друзья
 all my friends my all friends
 「すべての私の友達」 (Bailyn 2012: 47)

また、Bailyn (2012: 47) にあるように、Q は A にも先行する。

- (5) a. каждое красивое слово b. *красивое каждое слово
 every beautiful word beautiful every word
 「それぞれの美しい言葉」 (Bailyn 2012: 47)

Крылова и Хаврони́на (1984: 37) が指摘しているように、Dem は Poss に先行する。

- (6) a. этот Колин фильм b. *Колин этот фильм
 this Kolya's film Kolya's this film
 「このコーリヤの映画」

さらに、Bailyn (2012: 46) や Pereltsvaig (2007: 74) にあるように、Dem は A にも先行する。

- (7) a. этот новый дом b. *новый этот дом
 this new house new this house
 「この新しい家」 (Bailyn 2012: 46)

Q と Dem に関しては、語順に関わらずそもそも共起しない³。

- (8) a. *{каждый / всякий} эти книги b. *эти {каждый / всякий} книги
 every each these books these every each books
 「{それぞれの / あらゆる} これらの本」

³ ただし、Q *весь* 「全ての」、*любой* 「任意の」は、Dem と共起可能である。これについてのより詳細な分析、説明については今後の課題としたい。

2.2. タイプ理論による共起関係と語順の導出

一般にロシア語において DP を想定する研究において、2.1. で示したような名詞句内の要素の語順については、機能範疇の投射として統語論内で決定されていると考えられている。これに対し、Miyauchi (2014)、宮内 (2015, 2016) は束縛現象の点から、ロシア語の名詞句は NP であるとし、さらに、宮内 (2016) は、Dem、Poss、Q といった名詞句内の要素は付加詞であると結論付けている。このように、名詞句内の要素を付加詞であると考え、次の問題が生じてしまう。付加詞の語順は基本的に自由であるのに、上記要素の語順は実際にはかなりの程度固定されているという問題である。この問題を本稿では意味論で解決を図る。

Kaplan (1977) は Dem は直接指示の指標であるとしている。つまり、名詞 (句) は Dem による修飾により現実の個体と対応する。例えば英語の *this* は (9) で論理表示される。

$$(9) \llbracket \text{this} \rrbracket = \lambda P \lambda x [P(x)]$$

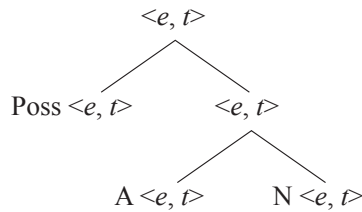
また、Partee and Borschev (1998) では、Poss について (10) のように論理表示がなされることが示されている。

$$(10) \llbracket \text{Mary's} \rrbracket = \lambda x [R(\text{Mary})(x)]^4 \quad (\text{Partee and Borschev 1998})$$

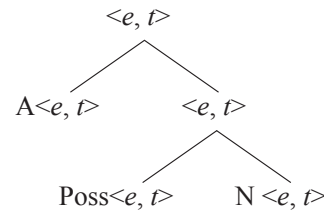
これらを受け、Bošković (2009) は、スラヴ語の場合でも Poss はタイプ $\langle e, t \rangle$ 、Dem はタイプ $\langle \langle e, t \rangle, e \rangle$ であるとしている。さらに、Q のタイプは一般に $\langle \langle e, t \rangle, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ であるとされる (Heim and Kratzer 1998 など)。

以下、これらの先行研究に従い、ロシア語の名詞句内の要素も上記のタイプを持つとし、その共起関係と語順がタイプ理論により導出可能であることを示す。まず、Poss と A の語順が自由であることは Predicate Modification⁵ により導出可能である。

(11) a.



b.



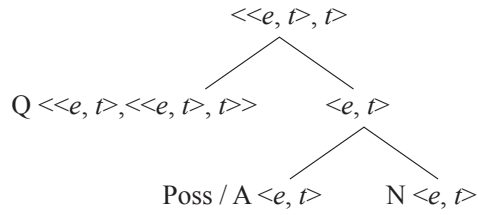
⁴ ここで、R は自由変項 (free variable) を表す。

⁵ Predicate Modification は以下 (i) の通りである。

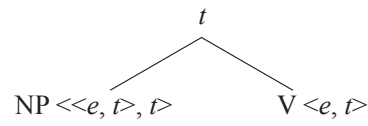
(i) If α is a branching node, $\{\beta, \gamma\}$ is the set of α 's daughters, and $\llbracket \beta \rrbracket$ and $\llbracket \gamma \rrbracket$ are both in $D_{\langle e, t \rangle}$, then
 $\llbracket \alpha \rrbracket = \lambda x \in D_e. \llbracket \beta \rrbracket(x) = \llbracket \gamma \rrbracket(x) = 1.$ (Heim and Kratzer 1998: 65)

Q が Poss / A に先行する場合は (12) のように意味計算がなされる。

(12)

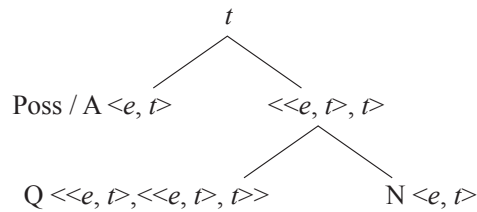


(13)



(12) の意味計算の結果、タイプ $\langle\langle e, t \rangle, t\rangle$ の表現が得られる。このタイプの表現を主語として 1 項動詞 (タイプ $\langle e, t \rangle$) を結合させたパターンの意味計算は (13) で示されるものとなる。(13) では、文 S のタイプは t となっており、正しく意味計算が行われていることがわかる。よって、(12) の意味計算も正しくなされており、Q が Poss、A に先行するという事実をとらえることが可能となる。また、Poss / A が Q に先行するパターンは、(14) で示す意味計算により排除できる。

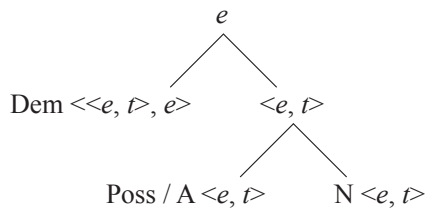
(14)



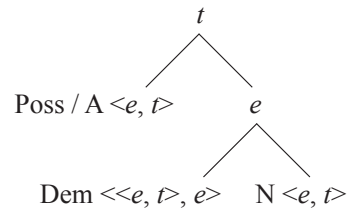
(14) の結果、タイプ t の複合表現を得る。当然、[Poss / A + Q + N] で構成される句は意味的に真理値を返すことはできない。

Dem が Poss / A に先行することも同様にタイプにより導くことができる。(15) は Dem が Poss / A に先行するパターンの意味計算を表している。

(15)



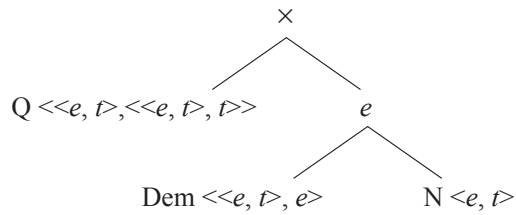
(16)



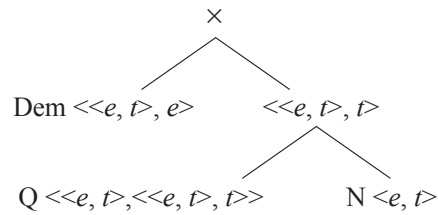
(15) の結果、得られる複合表現のタイプは e となる。つまり、[Dem + Poss / A + N] から成る句は個体を指示することになり、正しく意味計算がされている。Dem が Poss / A に後続すると非文法的、または容認度が低くなることも説明可能である。その計算を示したものが (16) である。(16) で得られる複合表現のタイプは t となる。[Poss / A + Dem + N] から成る句では意味的に真理値を返すことはできず、計算不可能となってしまう。

また、Q と Dem が共起不可能であることも導出可能である。

(17) a.



b.



(17 a) は Q が Dem に先行する句に、(17 b) は後続する句に対応する意味計算である。(17 a, b) とともに、タイプが適合せず意味計算が破綻してしまっている。

3. まとめ

本稿では、ロシア語の名詞句内の要素の語順が、タイプ理論を用いることで、正しく語順を予測できることを示した。これは、名詞句内の要素の語順を正しく導くということを理由にして、統語論的に DP を想定する必要はないということを示している。

(みやうち たくや、東外大院／国語研)

引用文献

- Крылова, Ольга А. и Серафима А. Хавроница. 1984. *Порядок слов в русском языке*, издание второе, Москва: Русский язык.
- Лютикова, Екатерина А. 2010. К вопросу о категориальном статусе именных групп в русском языке, *Вестник Московского университета. Серия 9: Филология* 6: 36-76.
- Abney, Steven P. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral Dissertation, MIT.
- Bailyn, John F. 2012. *The syntax of Russian*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bošković, Željko. 2009. More on the no-DP analysis of article-less languages. *Studia Linguistica* 62.187-203.
- Heim, Irene, and Angelika Kratzer. 1998. *Semantics in generative grammar*. Oxford: Blackwell.
- Kaplan, David. 1977. Demonstratives: An essay on the semantics, logic, metaphysics, and epistemology of demonstratives and other indexicals. In *Themes from Kaplan*, ed. Joseph Almog, John Perry, and Howard K. Wettstein, 481-563. Oxford University Press.
- Miyauchi, Takuya. 2014. On binding and the structure of nominal phrases: The case of Russian. a paper presented at the 14th European Conference on Formal Description of Slavic Languages (FDSL 10.5), Brno, Czech, December 4-6 2014.
- Partee, Barbara H., and Vladimir Borschev. 1998. Integrating lexical and formal semantics: Genitives, relational nouns, and type-shifting. In *Proceedings of the Second Tbilisi Symposium on Language, Logic and Computation*, ed. Robin Cooper and Thomas V. Gamkrelidze, 229-241. Center on Language, Logic, Speech, Tbilisi State University.
- Pereltsvaig, Asya. 2007. The universality of DP: A view from Russian. *Studia Linguistica* 61:59-94.
- 宮内拓也. 2015.「束縛現象とロシア語名詞句の統語構造」,『スラヴ文化研究』13: 69-106.
- 宮内拓也. 2016.「ロシア語におけるいわゆる名詞句の統語構造 — 束縛現象による DP 投射の有無の検証 —」, 修士論文, 東京外国語大学.
- 宮内拓也. 印刷中.「ロシア語における名詞句内の要素の語順: タイプ理論による考察」,『ロシア語研究』26.

現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察 ——可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について 【博士論文¹の概要報告及び今後取り組むべき課題について】

阿出川修嘉

0. はじめに：問題の所在とその解決に向けて

現代ロシア語において、アスペクトの意味を中心的に表す文法的カテゴリーである、体のカテゴリーは、しばしば他の意味・文法的カテゴリーとの相関関係について論じられるが、本研究では、こうした相関関係のうち、モダリティ（そのうち特に「可能性」の意味）のカテゴリーとの間の影響関係を対象として取り上げた。

可能性（とりわけ不可能性）の意味が文に含まれる場合、そこで用いられる不定形の体の形態選択に際して完了体が好まれるといった指摘がされるが、こうした記述では、「可能性」の意味の分類それ自体についての考察が不十分で、実際にどのような述語の場合にどのように体の形態が選択されているかの包括的な記述がなされていないなどの点が問題となる。

そこで、本研究では、1) 言語使用の実態の記述、2) 「可能性」の意味の明確化とその分類、3) 「可能性」のモダリティの意味を含む述語と結合する不定形の語彙的意味の考察などを主な課題として設定し、「可能性」のモダリティの意味を表す述語のうち、「内的可能性」を表す述語（уметь; способен; в состоянии, в силах）、「外的可能性²」を表す述語（можно, нельзя, возможно, невозможно）に加え、動詞 мочь を取り上げ、これらと結合する不定形からなる語結合のデータをコーパスから収集し、分析・考察を行った。

「可能性」のモダリティの意味を含む文は、1) 述語（モダリティの意味）、2) 不定形（及びその補語：「状況」の提示）、3) 否定辞（否定の意味）という、意味・統語的要素から成り、これらの組み合わせに応じて、便宜的に四つの意味・統語構造に分類が可能である。タイプ I（M - Inf³）は、「可能性」のモダリティの意味を表す最も基本的なタイプである（«Как я могу думать о смерти?»）。タイプ II（[M - (Neg - Inf)]）は、「可能性」のモダリティの変種と位置付けることができる（«Можно было бы не обращать на них особого внимания.»）。タイプ III（[(Neg - M) - Inf]）は、「不可能性」のモダリティの意味を表すタイプである（«Я не

¹ 阿出川修嘉「現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察 ——可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について——」（東京外国語大学大学院博士論文、2014 年）。

² 「内的可能性」とは、当該状況（動作）の実現が、主体そのもの、あるいはその主体の内的要因に依るものを指す。それに対して、「外的可能性」とは、当該状況（動作）の実現が、その主体の外的な要因（外的状況、社会的・自然的法則など）に依るものを指す。なお、こうした「可能性」の意味の分類と、それぞれの意味を表す述語の分類は、原則として Теория функциональной грамматики. Темпоральность. Модальность. (Л. 1990) に依拠している。

3 ここで、略号 M は述語を、Inf は不定形を、Neg は否定辞をそれぞれ表す。また、以下例文中、述語は太字で、否定辞は斜字体で示し、不定形には下線を施している。

могу называть требования закона “пустой фразой”.)。その変種であるタイプⅣ（[(Neg - M) - (Neg - Inf)]）は、いわゆる「不可避性」の意味を表す（«Признание этого человека не могло не внушать уважения.»）。これらの分類に従って、データを整理し分析を試みた。

1. 体の形態選択の実態とモダリティの意味との関わり

1.1. 非現実のモダリティと評定のモダリティ

モダリティの意味は、当該状況が現実世界に対してどのように位置付けられているかを扱う「非現実のモダリティ」と、当該状況の命題的部分に対する話者の態度に関わる「評定のモダリティ」とに大きく分類できる。例えば、「Он может петь «Марсельезу»。」という文は、イ）「彼はラ・マルセイエーズを歌える。」（非現実のモダリティ）、ロ）「彼はラ・マルセイエーズを歌ってよい。」（同）、ハ）「彼がラ・マルセイエーズを歌っているようだ。」（評定のモダリティ）など複数の解釈が可能だが、多くの先行研究において「可能性（あるいは不可能性）」の意味として扱われているものは、前者の「非現実のモダリティ」である。

1.2. 不定形の体の選択の実態：非現実のモダリティ

今回のデータから、非現実のモダリティを表す述語と結合する不定形の体の形態選択の傾向は、全体的に不完了体よりも完了体がより多く選択されていることが明らかになった。多くの先行研究では、「不可能性」の述語と完了体の結び付きについて特に指摘されていたが、今回対象とした、「可能性」の意味を含む述語と語結合を成す不定形の場合に限っては、全体的な傾向として完了体が多く選択されるという傾向を示し、「不可能性」の意味の場合に限って完了体が特段多く選択されるというわけでは必ずしもないことが分かった。また、「内的可能性」が表される場合には、その意味・統語構造にかかわらず、不完了体を選択される割合が多くなり、全体の傾向とは逆の様相を呈する。特に уметь の場合にそうした特徴は顕著で、これは先行研究での指摘をデータの面からも裏付けることができたと言える。

1.3. 評定のモダリティの場合

今回対象としている可能性の意味を表す述語のうち、動詞 мочь のみが、非現実のモダリティと評定のモダリティの双方を表すことができる。それぞれのモダリティとそこで現れてくる不定形の体の相関関係は下表のようにまとめることができる。

表 1：мочь のモダリティの意味と不定形の体の選択

タイプ	不定形の体	評定	非現実
I	完了体	○	○
	不完了体	—	○
II	完了体	○	—
	不完了体	—	○
III	完了体	—	○
	不完了体	—	○
IV	完了体	○	○
	不完了体	—	○

2. 語彙体系内での述語の棲み分け

今回のデータの数量的分布から、上述の四つの意味・統語構造のうち、いくつかのものは、極めて頻度が低く事実上ほとんど使われないものがあることが明らかになり、また、それぞれの述語がどの意味・統語構造で用いられるかについても特徴付けが可能となった。それぞれの述語の語彙体系内での棲み分けは以下のように表すことができるだろう。

表2：データの数量的分布に基づいた述語の用法

タイプ	モダリティの種類		
	評定のモダリティ	非現実のモダリティ	
		内的可能性	外的可能性
I	мочь	мочь, уметь, способен, в состоянии	мочь, можно, возможно
II	мочь	—	мочь, можно
III	—	мочь, уметь, в состоянии, в силах	мочь, нельзя, невозможно
IV	мочь	—	мочь, нельзя

3. 体の形態的対立のスケール

体の選択とモダリティの意味との間にある程度の相関関係が観察される一方で、異なる意味・統語構造で用いられていても、常に一定の体の形態でのみ顕れてくる動詞語彙の存在も明らかになった。この偏向的な選択傾向を数値で示すために、本研究では「体の形態的対立のスケール」（以下「スケール」）という概念を提案した。この「スケール」の示す値が10に近いほど、その動詞語彙は完了体が選択される割合が高く（今回のデータでは помогать/помочь, оказываться/оказаться, случаться/случиться などの動詞語彙）、逆に-10に近いほど、不完了体が選択される割合が高くなる（同 служить/послужить など）。これらの値を利用し、様々な動詞語彙の体の選択傾向を特徴付けた。

ここでの偏向的な選択傾向というものが、今回取り上げた、可能性の意味を表す述語との語結合のケースに特有のものなのか、あるいは動詞が不定形で用いられる場合に共通して見られる傾向なのかについても今後比較・検証を重ね、不定形の体の選択傾向に関する記述をより精密なものにしていく。

4. 今後の課題

今後取り組むべき大きな課題として、可能性のモダリティを表す形式の平行的使用に関する問題がある。可能性のモダリティを表す形式には、語彙的手段によるもの（cf. Ты не можешь этого понять; Тебе этого нельзя понять!）の他に、体・時制形態によるもの（cf. Ты этого не поймёшь!）、不定法文によるもの（cf. Тебе этого не понять!）が用意されているが⁴、今回対象に含められなかった後二者の言語形式についても考慮に入れ、上で触れた述語の

4 Cf. Теория функциональной грамматики. Темпоральность. Модальность. Л., 1990. С. 127. なお、ここで挙げてある例文は筆者による。

語彙体系内での分布とも関連付けながら、これらの形式がどの程度平行的に用いられうるかについて記述の充実を図る必要がある。

(あでがわ のぶよし、東外大非常勤講師)

日本ロシア文学会関東支部規約

1988 年 10 月 5 日 制定・支部登録
2015 年 6 月 最終修正

- 第 1 条 本支部は日本ロシア文学会関東支部と称する。
- 第 2 条 本支部は日本ロシア文学会の会則に基づいて、その目的達成のために独自に次のような事業を行う。
- (1) 共同の研究ならびに調査。(2) 研究発表会・講演会の開催。
- (3) 機関誌の発行。(4) その他本支部の目的を達成するために必要な事業。
- 第 3 条 本支部は原則として、関東地方および新潟県在住の日本ロシア文学会会員をもって組織する。
- 第 4 条 本支部について次の機関をおく。
- (1) 総会 (2) 運営委員会
- 第 5 条 総会は本支部の最高議決機関であり、毎年 1 回開催するものとする。ただし必要に応じて臨時総会を開くことができる。総会の議決は出席会員の過半数によって成立する。
- 第 6 条 運営委員会は支部長と運営委員をもって構成し、支部の運営にあたる。
- 第 7 条 本支部に次の役員をおく。
- (1) 支部長 (2) 運営委員 (3) 事務局長 (4) 監事
- 第 8 条 支部長は支部選出の理事の互選により選出する。
- 第 9 条 支部長は本支部を代表し、支部の運営を統轄する。
- 第 10 条 運営委員は、別に定める選出規定により選出する。
- 第 11 条 運営委員は、運営委員会を構成し、支部の運営を分担する。
- 第 12 条 事務局長は、支部事務局担当大学選出の運営委員とし、会計・事務を担当する。
- 第 13 条 監事は、別に定める選出規定により選出する。
- 第 14 条 監事は、年度末に会計監査を行い、総会でその報告を行う。
- 第 15 条 役員の任期は 2 年とし、重任を妨げない。
- 第 16 条 本支部の経費は会費、補助金その他の収入をもってこれにあてる。
- 第 17 条 会費に関する規定は別に定める。
- 第 18 条 本支部は、事務局をおき、本支部の会計および事務全般を委ねる。事務局設置の規定は別に定める。
- 第 19 条 運営委員会は毎年決算報告を作成し、総会の承認を求めなければならない。
- 第 20 条 本支部の会計年度は 10 月 1 日に始まり、翌年 9 月 30 日をもって終わる。
- 第 21 条 本規約の改正および諸規定、内規の制定・改正は総会の議決による。

支部規約に関わる規定

- 1) 第 10 条に関わる運営委員選出規定
支部事務局分担大学所属会員、および関東地方と新潟県にある日本ロシア文学会事務局分担大学所属会員がそれぞれの大学から 1 名の委員を選出したのち、支部長とそれら委員が上記大学所属会員以外から若干名選出する。
- 2) 第 13 条に関わる監事選出規定
監事は、支部会員から 2 名を支部長が指名するものとする。
- 3) 第 15 条に関わる会費規定
年額 1000 円とする。会費の改訂は支部総会の承認を要するものとする。
- 4) 第 16 条に関わる事務局設置規定
支部事務局は、関東地方と新潟県にある大学のうち、原則として所属会員が 2 名以上いる大学が協議の上、もちまわりで適宜順番を決め、2 年ずつ担当する。ただし日本ロシア文学会事務局分担大学はこの限りでない。
- 5) 第 8 条に関わる理事候補選出規定
支部選出の理事候補については、支部総会で承認を受けた選挙管理委員会が選挙を実施する。支部選出分 14 名のうち、10 名は選挙結果に基づいて選び、4 名は支部長が運営委員会の承認を得た上で指名するものとする。ただし、選挙結果によって選ばれる 10 名分については連続三選を認めない。なお、この規定は 2017 年度の理事選挙から適用される。

〈関東支部事務局からのお知らせ〉

支部事務局では、学会名簿にアドレスが掲載されている会員への諸連絡をメールで行うようにしております。メールの変更がありましたら、支部事務局にご一報くださるようお願い致します。

引き続き葉書による通知を希望される方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

なお、2016 年 1 月より関東支部事務局は埼玉大学に移りました（2018 年 12 月まで）。連絡先は下記をご参照ください。

日本ロシア文学会関東支部報第 34 号

2016 年 10 月 15 日発行

発行・編集 伊東一郎・野中進

発行元 日本ロシア文学会関東支部

発行所 埼玉大学人文社会科学研究科野中研究室気付 日本ロシア文学会関東支部事務局

〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255

Tel. 048-858-3759

E-mail : robunkanto@gmail.com ; nonaka@mail.saitama-u.ac.jp

印刷所：松籟社